慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	直江兼続一座漢倭聯句百韻「楓散風紅色」注釈
Sub Title	
Author	小川, 剛生(Ogawa, Takeo) 川﨑, 美穏 出村, 奈那恵
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2015
Jtitle	三田國文 No.60 (2015. 12) ,p.120- 160
JaLC DOI	10.14991/002.20151200-0120
Abstract	
Notes	図削除 挿表
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20151200-0120

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

直江兼続一座漢倭聯句百韻「楓散風紅色」注釈

小川剛生・川﨑美穏・出村奈那恵

はじめに

直江兼続主催のこの漢和聯句百韻「楓散風紅色」（以下、「本漢和聯句」等と略す）は、それ自体の存在は知られており、既に『大日本古文書　上杉家文書』九六八や、『大日本史料』一二編之三二・元和五年十二月十九日条に翻刻が収められているが、参加者の紹介、興行時期の推測、数句の引用にとどまり、全体の内容を読み解いた研究はない。

しかし、その興行が朝鮮出兵をはじめ秀吉と上杉家との政治的結びつきが本格化する時期であること、メンバーが兼続を中心とした当時の上杉家文壇を構成する武士・禅僧らであり、特に歌学に通じた成田氏長・木戸元斎、連歌師の紹旨・了意、さらに秀吉・家康の政治顧問として知られる西笑承兌など著名人を含むなど、かたがた注目すべきものである。兼続は天正末年から慶長初年にかけて、知られるだけで一二回の連歌・聯句に参加しており、文芸への意欲は非常に旺盛であったと言える。

このような兼続および上杉家の文壇の、代表的成果としての意義が認められることから、本漢和聯句の注釈を試みた。原稿は川﨑・出村両名の輪読形式で進め、小川が修正した。式目表は川﨑が作成し、「まとめ」は出村が執筆した。

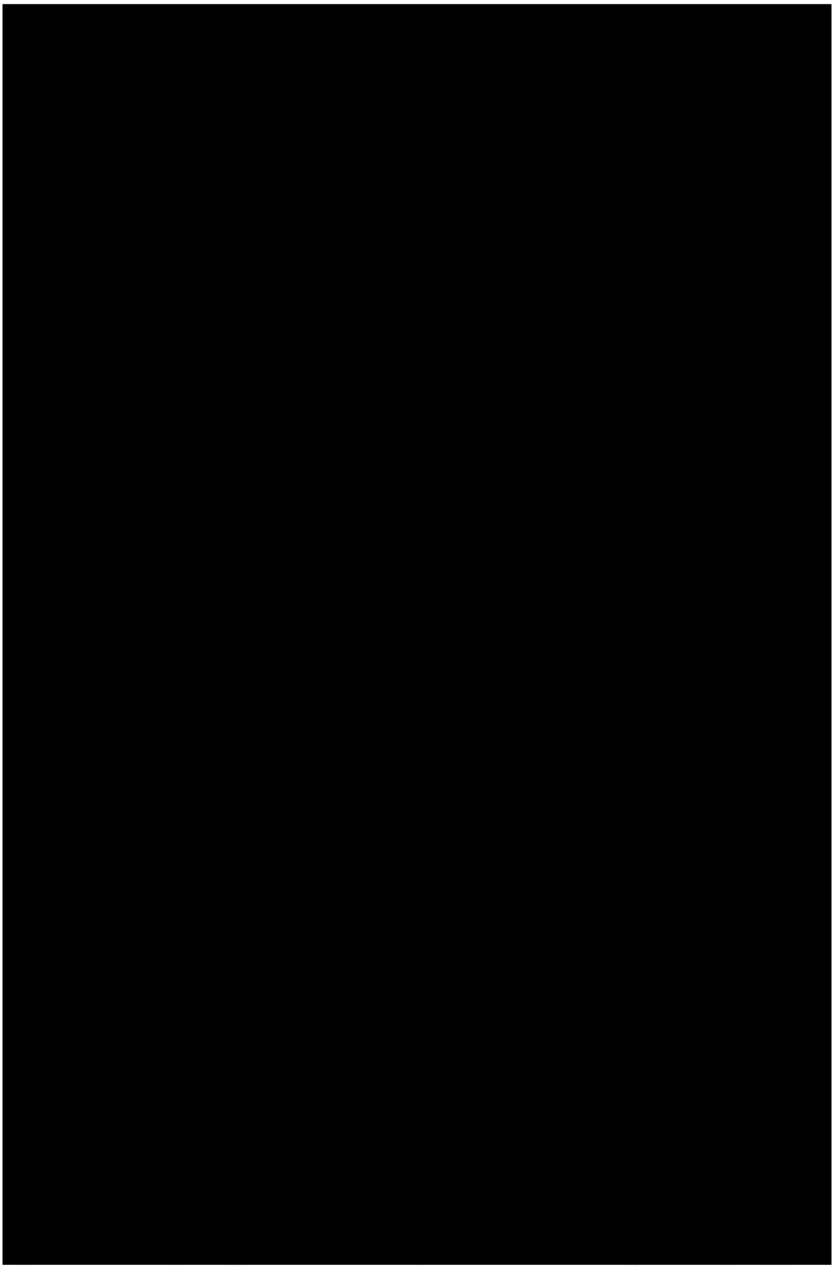
底本には、米沢市上杉博物館蔵『直江城州漢倭』を使用し、刊本『上杉家文書』と東京大学史料編纂所蔵謄写本を適宜参照した。

一、底本書誌

まず、底本の書誌について略記する。

目録書名は「直江兼続一座漢倭聯句百韻写」。整理番号四三八。袋綴一冊。弁柄色後補表紙（一五・〇×二〇・七糎）。外題は左肩に後補貼題簽、「直江城州漢倭　全」と墨書、原題簽は見返しに貼付、「直江城州漢倭　全」と墨書。内題は「漢倭」とのみ。料紙は楮紙。一〇行書。字面高一三・五糎。墨付六丁、後遊紙九丁。奥書識語などなし。まれに語注あり。同筆で返り点・傍訓・縦点・送り仮名・清濁などを附す。江戸末期から明治初期の書写と見られるが、書写態度は厳密である（図版参照）。

なお明治期のものと思われる包紙のウハ書に「一印／京都ニ



図版「直江兼続一座漢倭聯句百韻写」（上杉家文書438）
所蔵：米沢市上杉博物館（上段・一丁表、下段・六丁表）

て直江山城守相国寺兌長老／を招漢和興行之懐紙写／（朱）『筆者　宇津江朝清』」とある。親本は本漢和百韻にも参加する宇津江朝清の筆にかかるという。朝清は兼続の右筆で、しばしば連歌・聯句では一座の執筆を務めていたので、近代の証言ながら、信憑性はあろう。但し、漢句一句のみを出している来次氏秀が当時の慣例に照らせば、執筆であった可能性もある。(1)

現在のところこれ以外の伝本は知られず、これまでの翻刻・謄写本はすべてこの本を底本としている。

二、翻刻本文

ついで漢和聯句百韻本文を掲げる。底本を忠実に翻刻したが返点ルビなどはやや体裁を変じた所もある。

漢倭

1 楓散〆風紅色　西咲
2 しくるゝあとの山の傍　昌茂
3 月になる霧の降そふ瀧おちて　氏長
4 捲簾好賞商　兼続
5 暮天看盡鳫　仙需
6 田面の原のかすむをち方　了意
7 川音も日のさす影も長閑にて　紹旨
8 雪消岩径彰　朝清」（初折オ）
9 経岨樵歩倦　言俊
10 かさなる山そ雲に藏るゝ　壽三
11 扇こそ明行月の名残なれ　素仙
12 空閨幾斷腸　氏秀
13 とはれしとおもふか内に憑まれて　昌茂
14 十年釣渭姜　太公望也　西
15 鷗辺無黜陟　兼
16 ふもとの嵐吹すつる迒　長
17 たえ〳〵の霧にむら立松みえて　意
18 秋寺不尋常　需
19 鐘破永宵夢　清
20 敷かへけりな衣手の霜　旨
21 雪ほとはつもらぬ花の苔むしろ　三
22 風微桃李場　言」（初折ウ）
23 春遊歸計少　西
24 雲ゐはるかになく夕鶴　仙
25 かすむ野の日の色うすみ雨晴て　長
26 分行さとにつゝくむら簷　茂
27 景落畫工手　需
28 山彰金佛相　続
29 を初瀬やくるとあくとの鐘の聲　旨
30 月にはけしき秋の川飈　意
31 冷袖舟先繫　俊
32 露盤玉已瑲　咲
33 浮なみたまきれやするの亂碁に　仙
34 淡燈照獨床　清
35 童眠書儘擲　続
36 道のをしへそうたゝ忘る　三」（二折オ）

37 さきたつる行衛をたとり山くれて　意
38 眞柴こるおのかへるかた岡　旨
39 花ハ雖ニ幽一處ト一美ナリ　咲
40 杏ハ在テニ遠一村一粧ウ　需
41 おもふとちまとひにあかぬ春なれや　茂
42 溪一流飛ニ羽一觴ヲ一　続
43 もらさしとかけしを君の恵にて　三
44 しもかしもまて人そ惶るゝ　仙
45 矮一屋難シレ推シレ暑ヲ　清
46 密一雲奈レ隔ルヲレ郷ヲ　俊
47 かへりみる跡遠さかる旅の空　長
48 浪よりなみにこく奥津艘　意
49 更深ケテ月寒ク一冱　需
50 日昇一峯近ク一望ム　咲（二折ウ）
51 霞もや山かた分て晴けらし　旨
52 ほのかにかへる鴈の一行　長
53 塵裡負レ春一客　続
54 朝一来下ルレ殿ヲ嬾　清
55 僞一眞難キハレ辨シ約ク　咲
56 あひおもふにもつらき妨　三
57 露一間疎一影ノ月　俊
58 秋の田つらの行かひも亡し　茂
59 やゝ寒き伏見の野邊のくるゝよに　意
60 風のまゝなるすゑの篁　旨
61 関一寂鳥知ルレ楽ヲ　需

62 聯一翩蝶似リレ狂スル　咲
63 花さくはすみれましりのくさむらに　仙
64 霞一融シテ詩一債償サイヲツクノウ　続（三折オ）
65 けふもたゝ酒のむしろにくらしはて　長
66 市のかりやにとまる資　意
67 ふりきぬる雨の氣色を三輪か崎　三
68 袖に杉間の風そ荒たる　仙
69 波一激メ停ム二征一櫓ヲ一　清
70 海一深括二智一嚢一　需
71 濁一清胸不レ混ヲ　咲
72 今一古力擒スレ強ヲ　続
73 國遠き御調もはこふためしあれや　旨
74 民の家居も猶昌なり　茂
75 晩一煙山鎖一着サチヤク　俊
76 朧一月水忩一忙　咲
77 瀧津瀬にせきとめられぬ花散て　意
78 しつえかたよる岸の青楊　旨（三折ウ）
79 機一外遊一絲乱ル　需
80 樓一頭横一笛揚アカル　俊
81 つまことのおもひもまさる秋のくれ　茂
82 別一涙露濃ジヤウ々　清
83 電一頃相一逢處ロ　咲
84 のこるもうすき袖の移り香　長
85 取とむる衣を形見もはかなしや　旨
86 あつまのはてにかへる裝ひ　茂

87 あら玉の年や今朝より霞むらん　三
88 鶯モ亦タ弄ス春光ニ　咲
89 吟履為メレ花ノ緩シ　続
90 あかぬをまゝの袖の倡ひ　意
91 とくはたゝかはる日毎の法の道　仙
92 秋になりぬる月の涼しさ　三」（名残折オ）
93 すゝむしの声は砌に遠からて　旨
94 露ハ於テニ蘭草ニ芳シ　続
95 分かへる野はたひ〳〵の雨そゝき　意
96 暮れはしはし人そ彷徨　仙
97 深宮門可シレ鑰ヤクス　咲
98 少室渡リ堪リレ航フナワタシスルニ　需
99 なかれあるとみのを川の末廣み　茂
100 たちそふ波のとをき旁　長」（名残折ウ）

相國寺兌長老 西咲　十三
房州里見殿ノ後見 紹旨　十
城織部 昌茂　九
宇津江九右衛門 朝清　七
成田下総守 氏長　八
池上兵部少 言俊　七
直江山城守 兼続　十
木戸元斎 壽三　八
同歸衣僧 仙需　九
竹田 素仙　八
成田内衆 了意　十
來次出雲守 氏秀　一

三、興行時期・連衆

本漢和聯句の興行時期は、明徴がないが、藤木久志は「文禄二年頃カ」と推定している。(2) 文禄二年（一五九三）という意見は首肯されるが、季は秋とすべきである（1句注釈参照）。また、包紙にあるように、相国寺の西笑承兌を迎え、京都で行われたとしてよいであろう。

文禄元年、文禄の役が勃発すると、豊臣秀吉の命で上杉景勝・直江兼続は上洛し、ついで渡海。そのまま年を越し、翌二年正月十日に兼続は景勝とともに、朝鮮における陣中で連歌会を開催している。九月に兼続は景勝とともに肥前名護屋に帰陣している。秀吉から帰国を許されると、両人はただちに西上したようで、閏九月二十七日、相国寺の有節瑞保が兼続と玄齋（木戸元齋か）に贈り物をしている。また、十月十二日にも直江公の名が見られ、前日の十一日に「北闕太閤相國（豊臣秀吉）」において行われた能に参加したとある（以上鹿苑日録）。少なくとも文禄二年十月の時までの在京が確かめられる。いっぽう、同三年になると、秀吉の命によって伏見城総構堀普請に従事するため上洛回数が多くなり、京都での滞在も多くなる。この漢和聯句は、以上のような情勢の狭間で興行されたものである。一応、文禄二年九月から閏九月の間の催行と見られるが、三年秋の可能性もある。なお、本聯句の興行時期については別に論ずる予定である。

連衆は十二名で、百韻を詠むのに平均的な人数であり、漢和それぞれ六名ずつ。巻末に作者と句数を記した句上がある。句

上は出詠順に右から左へと記されている。これをもとに、連衆を紹介する。（　）内は14句以後用いられる略称。

［漢句作者］

・西笑(西・咲。咲は笑と通用)…西笑承兌。相国寺長老、鹿苑院主、秀吉・家康の政治顧問。有名な直江状では兼続と家康との間を媒介した人物。慶長十二年（一六〇七）十二月二十七日没、六十一歳。

・兼続(兼・続)…直江。伝は略す。

・仙需(需)…伝未詳。句上に兼続の帰依した僧とある。

・朝清(清)…宇津江九右衛門。直江直属の与板衆（与板城時代からの側近）。執筆。都の連歌会でもしばしばその役を務めた。後世「能書にて文学大才」（越後治乱記・御家中諸士略系譜）と評される。

・言俊(言)…句上に「池上兵部少輔」とある。兼続の家臣[3]。

・氏秀…来次出雲守。直江抱（兼続の家来）。出羽国人、庄内羽黒山神職家の出身。はじめ最上氏に仕え、天正十九年庄内藤島一揆討伐の時、景勝に帰服した。

［和句作者］

・昌茂(昌)…城。織部佑・和泉守。武田信玄の家臣で武田氏滅亡後、家康に仕えた。寛永三年（一六二六）七月二日七十六歳で没。

・氏長(長)…成田下総守。はじめ上杉謙信に、ついで北条氏に仕えるが、天正十八年秀吉の小田原攻めで没落。翌年に上洛し、秀吉から下野烏山城を与えられる。歌学に通じ連歌をよくした。文禄四年（一五九五）十二月十一日没、五十四歳。

・了意(意)…紹巴門の連歌師。師の点を受けた千句があり、連歌初心抄の著もある。なお、句上に「成田内衆」とあるように、氏長が召し抱えていた。

・紹旨(旨)…連歌師。里村紹巴の弟子。関東衆。句上に「房州里見殿」の後見とある。これは里見義康（一五七三～一六〇三）か[4]。

・壽三(三)…木戸元斎。俗名は範秀、和泉守、遁世して沙弥休波と号す。羽生城主忠朝二男。上杉景勝の実父長尾政景の代に浅間石見守とともに執権職にあった[5]。関東歌壇の重鎮としても著名で、後年には景勝側近の雅客となった。

・素仙(仙)…句上に「竹田」とある。紹巴門の連歌師か。

四、注釈

注釈で掲げる本文は、番号を付し、読みやすい表記に改めた。和句は清濁を施し、送りがなを補うなどした。漢句は底本の傍訓返点などを略し、訓読を併せて示した。

【式目】として、まず季・月・花・恋（同字）、旅・神祇・釈教・述懐、動物（鳥獣虫魚）・植物（木草竹）、時分・夜分・天象、山類・水辺・居所とその体用、降物・聳物、人倫・名所・国名・衣類・食物などの別を示した。判断の根拠を（　）に入れた。ついで物数（使用回数制限）を漢和法式・應安新式によって注したが、産衣も参照した。該当する語の使用上限数を丸数字で、使用回数をアラビア数字で示した。例えば「②時雨1」とあれば、時雨は一座二句物で、初めて用いられたことを意味する。

【平仄】は平○、仄●、押韻字◎によって示した。【韻字】では偶数句での押韻字を指摘した。漢和なので和句も押韻するが、使用された韻字と訓は、和訓押韻（島原松平文庫本）・漢和三五韻（貞享版本）で確認した。

【句意】として原則として前句に付いた時の通釈を示した。ついで語釈や典拠を示した。各種文献の引用は通行の字体に拠ることにし、かつ読みやすい表記に改めたが、漢詩文の引用は書き下し文を（　）に入れて示した。和歌の本文・番号は新編国歌大観によるが、室町以後の私家集は新編私家集大成による。連歌の句例は国際日本文化研究センター、連歌データベースを活用し、可能な限り原典に当たり本文を確認した。

【付合】では、前句とのつながりを中心として考察した。寄合語や付合の認定には、連珠合璧集、連歌付合の事、随葉集・拾花集・竹馬集などを参照し、「覆トアラバ…のどかなる」といった形で、適宜省略して掲げた。

最後に百韻の式目表を作成して掲げた。式目に違反する箇所には網かけした。

以上の体例は先行注釈書に倣ったが、とりわけ、深沢眞二『「和漢」の世界』（清文堂出版）の「第Ⅳ部作品注釈」、京都大学国文学研究室・中国文学研究室編『文明十四年三月二十六日　漢和百韻譯注』（勉誠出版）などに学んだ所が大きい。学恩に深謝する。

1　楓散風紅色（楓散じて　風　紅色たり）　西咲

【式目・平仄】秋（楓）、植物木（楓）。○●○○●。

漢和聯句の第唱句も当座の季景を詠むことを考えれば、発句としての役割を果たしており、本一座が秋に興行されたと分る。

【句意】楓の葉が散り、風が紅色に吹く。

「楓散」は産衣に「楓　秋也。若楓は夏也。…異本ニ名木の散に准じて散も秋也。紅葉に折嫌」とあり、また楓が秋に詠まれた詩句に「鐘声半夜香山雨。散入前渓楓葉秋（鐘の声は半夜の香山の雨。散じて前渓に入りて楓葉秋なり）」（新撰朗詠集・山寺・五三九・何玄「宿宝塔寺（宝塔寺に宿す）」）がある。

2　しぐるゝあとの山の傍（かたはら）　昌茂

【式目・韻字】秋（しぐるゝ）、山類体（山）、降物（時雨）。②時雨1。「傍」で陽唐韻を踏む。

二句目の押韻字を「入韻字」といい、形式的にこの巻の韻は陽唐韻に定まった。「傍」は、韻府群玉・一三によれば、下平声「七陽〈與唐同用〉」に属する。いわゆる陽唐韻で、以下和訓押韻・漢和三五韻でも陽唐韻の項に在り、「かたはら」の訓が見える。

【句意】時雨の降った跡が見える山の側面。

「しぐるゝあと」は時雨の通った跡の木々が特に色づくということで、用例は「紅葉葉の山をめぐりて色づくはしぐるるあとのみゆるなりけり」（弘長百首・紅葉・三四三・信実）などが見られる。「山遠くしぐるゝ跡は霧こめて」（文明七年因幡千句・第一・九・承世）はそこを霧が立ち隠す情景。

【付合】寄合語がある訳ではないが前句の楓の落葉に、時雨がふりそそいだあとが見えるとして句意で付けた。

3　月になる霧の降りそふ瀧おちて　　氏長

【式目】秋（霧・月）、夜分（月）、聳物（霧）、光物（月）、水辺体（瀧）。②瀧1。

連歌では「瀧」単体では一句物だが、漢和法式では一座二句物、「只一、名所一、涙ノ瀧別有之」とある。

【句意】いずれ月夜になるであろうが、瀧の落ちるあたりに、霧も降りて来ている。

「月になる」は、伝統的な和歌の詠法では「慣る」の意がほとんどであるが、ここでは「いずれは月夜になる」の短縮した言い方であろう。「しがのうらや月に成るらしおほひえや峰にひかりの遠ざかりゆく」（雪玉集・一二二六「嶺月」）、「月になる霧の水上なほすずし」（永禄四年三月二十二日何垣百韻・八一・宗養）など、同時代の例が見られる。

【付合】連珠合璧集に「霧トアラバ…時雨」とある。第三句目で、時分が夜に経過し、山々の紅葉の景色から水辺への展開をはかったと言える。

4　捲簾好賞商（簾を捲きて商を賞するに好し）　兼続

【式目・平仄・韻字】秋（商）、居所用（簾）。○○●●◎。「商」。

【句意】簾を捲き上げて秋を楽しむのに好い頃である。

「捲簾」とは、簾を捲き上げ、外の景色を眺める意で、たとえば「畫棟朝飛南浦雲。朱簾暮捲西山雨（畫棟朝に飛ぶ南浦の雲。朱簾暮に捲く西山の雨）」（古文真宝後集巻三・滕王閣序・王勃）とある。「商」は、「仲秋之月、其音商（仲秋の月、其の音は商）」（礼記・月令第六）とあるように、五音の「商」を四季の秋に当てたもの。

【付合】水が簾のように垂れることから滝の異称を「水簾」といい、そこから滝と簾が付合となる。たとえば「曲水をなし石を立て、水簾・水錦のけしき、庭前の面景、ことごとく水躰を作成せるは…」（世阿弥・曲附次第）とある。

5　暮天看尽鴈（暮天に看尽くす鴈）　仙需

【式目・平仄】秋（鴈）、時分（暮天）、動物-鳥（鴈）。②鴈1。●○○●●。

「鴈（雁）」は新式で「春一。秋一、如此二句之物、懐紙をかへてすべき也」、漢和法式でも「春一、秋一」とされ、一座二句物である。

【句意】暮れかかる空に見えなくなるまで見つめていた雁。

「暮天」は暮れかかる空のことで、雁との取り合わせは「鴻声断続暮天遠、柳影蕭疎秋日寒（鴻声断続し暮の天遠し、柳の影蕭疎として秋の日寒し）」（新撰朗詠集・雁・三〇一・李順）などの用例が見える。

【付合】秋を「商」と表記することから、雁との寄合で、前句では商で「しょう」という韻を踏んでいるのみだったが、付合で「商」の字を使ったことが活きてくる。「胡雁一声、秋破商客之夢、巴猿三叫、暁露行人之裳（胡雁一声、秋商客の夢を破る、巴猿三叫、暁行人の裳を霑す）」（和漢朗詠集・猿・四五七・大江澄明）を踏まえる。「商客」は行商人。

6　田面の原のかすむをち方（かた）　　了意

【式目・韻字】春（かすむ）、聳物（霞）。④原1。「方」。

【句意】田の広がる原の遠くの方が霞んでいる。

「田面の原」とは、田のおもてのこと。

【付合】伊勢物語・一〇段、「み吉野のたのむのかりもひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる」より、田面と雁がつく。秋から転じ、春の帰雁にとりなした。

7　川音も日のさす影も長閑にて　　紹旨

【式目】春（のどか）、水辺体（川）、光物（日）。①のどか1。

【句意】川の音も、さす日の光もうららかで。

【付合】連珠合璧集「霞トアラバ…のどかなる」。田面の傍らに日影のうららかな水辺の景を付ける。「日影さす岡辺の雪やきえぬらむ／つくる田面の水にごるなり」（宝徳四年千句・何船第三、三・竜忠、四・日晟）など。

8　雪消岩径彰（雪消じて岩径彰はる）　　朝清

【式目・平仄・韻字】春（雪消）。④雪1。●○○●◎。「彰」。

【句意】雪が消えて岩山の道が顕わになった。

【付合】随葉集に、「雪消とあらば、日のさす…河水のます」とある。雪解け水が多くなって川の音が高くなるような状況。

ここまでが初折オモテである。漢和法式によれば、「面八句、漢四句和四句也、内ニ漢ノ対句一所あるへし、漢昌句なれは八句目和也、和ノ発句なれは八句め漢句也」とあるが、本聯句の初折オモテは、漢句の対句はなく、漢が発句であるのに八句目は和句ではなく、法式を忠実に守っているとは言い難い。

9　経岨樵歩倦（岨を経て樵歩倦む）　　言俊

【式目・平仄】雑、山類体（岨）、人倫（樵）。②岨1。○○○●●。

「岨」は、産衣に「〈山の嶮岨也。〉只と、名所と、二句也。岨ニかけ路、五句。仍説。〈山のそバ、田のそバなど地のかたさがりに、けんそなるを云也。〉」とあり一座二句物とする。

【句意】険しい崖を伝わって樵夫の歩みは倦み疲れる。

「樵歩」は用例乏しいが、8と対をなすので樵夫の歩みの意であろう。前句で雪が融けて現れた道を歩むととりなした。

【付合】明確にないが、「岩径」を「岨」で受けるか。

10　かさなる山ぞ雲に藏（かく）るゝ　　壽三

【式目・韻字】雑、山類体（山）、聳物（雲）。句末は「る」であるが、韻字は「藏」でとる。和訓押韻（北岡本）「藏（カクルヲクラ）小―山名」、漢和三五韻「蔵（カクス　ヲサム　カクル）」。

【句意】連なる山は雲に隠れてしまった。

「かさなる山」は、「岩根ふみかさなる山はなけれどもあはぬ日かずをこひやわたらん」（拾遺集・九六九・坂上郎女）、「雲かかりかさなる山をこえもせずへだてまさるはあくる日のかげ」（拾遺愚草・上・朝恋・八六七）などに見られる。

【付合】連珠合璧集に「樵夫トアラバ、山」とある。

11　扇こそ明け行く月の名残なれ　　素仙

【式目】夏（扇）、恋（名残）、時分（明け行く）、光物（月）。②名残1。扇は漢和法式に夏として見える。

【句意】扇の形こそ明けゆく中で見えなくなった月の名残なのである。

【付合】「月隠重山兮、擎扇喩之、風息大虚兮、動樹教之（月重山に隠れぬれば、扇を擎げて之に喩ふ、風大虚に息んぬれば、樹を動かして之を教ふ）」（和漢朗詠集・仏事・五八七・摩訶止観）、「月」「重山」「扇」と語が重なり、典拠である。「月」は真理の喩、真理が見えなくなってもその類似のものを示して理解させるの意。

12　空閨幾斷腸（空閨幾たびか断腸ぞ）　氏秀

【式目・平仄・韻字】恋（空閨）、夜分（空閨）、居所体（空閨）。①閨1。○○○●◎。「腸」。

【句意】ひとり寂しく寝る悲しみはどれほどのことか。

「空閨」は、相手がなく一人で寝るさびしい寝室のこと。「断腸」は、子猿を捕えられて悶死した母猿の腹を割いてみると、腸がばらばらに断ち切れていた故事から、甚だしい悲歎を指す。

【付合】連珠合璧集に「扇トアラバ、…閨」。前句の月が男の、扇は女の暗喩としてみると、扇は秋になると用済みのものとして捨てられてしまう。故に閨中には相手となるはずの男がいない、女の哀愁として付けられる。「班女閨中秋扇色、楚王台上夜琴声（班女が閨の中の秋の扇の色、楚王の台の上の夜の琴の声）」（和漢朗詠集・雪・三八〇・尊敬）とある。

13　とはれじと思ふが内に憑まれて　昌茂

【式目】恋（憑む）。

【句意】やって来まいと思っているがやはり心のどこかで来てくれないかと期待してしまう。「憑まれて」とは、期待してという意。

【付合】男の訪れを期待してひたすら待つ女の心情で付けたと理解できる。この趣向は近い時代でも「夕月夜有明の空にうつるまで問はぬを頼む我そつれなき」（実枝集・七六四・「連夜待恋」）などの作例がある。

14　十年釣渭姜（十年　渭に釣する姜）　西

【式目・平仄・韻字】雑、述懐（釣）、水辺体（渭）、水辺（釣）、人倫（姜）、名所（渭）。●○●●◎。「姜」。

【句意】後の太公望となる姜は十年渭水にて釣りをしていた。

「渭」は渭水。「渭浜の器」の故事が連想される。「姜」は底本傍書に「太公望也」とある通り、文王の軍師呂尚のこと（姜はその姓）。優れた主君になかなか巡り会えず、老年になって渭水で釣りをしていた時、文王に見出され、輔佐して殷を滅ぼした。文王らの先祖、太公（古公亶父）が待ち望んでいた賢者という意味で、太公望と名づけられた。応永二十七年本論語抄・泰伯に「渭叟ト云ハ、渭水ニ釣スル時ノ称也。一字名ニ仕フ時ハ、姜トモ望トモ呂トモスル也」とある。呂尚は八十歳で渭水で釣をし九十歳で文王の師となったと伝えられるのでその間「十年」だが、ここは「三千六百釣」の語に拠るか。李白「梁甫吟」に「八十西来釣渭濱。寧羞白髪照清水、逢時吐気思経

綸。廣張三千六百釣、風期暗與文王親（八十西に来つて渭濱に釣す、寧ろ羞ぢむや白髪の清水を照らすを、時に逢ひ気を吐いて経綸を思ふ、廣く張る三千六百釣、風期暗に文王と親む）」（分類補註李太白詩・三）。

【付合】訪ねる、頼みにすることを太公望の故事で受ける。前句の男を待つ女と、訪れはあるまいと思いつつ待ってしまう太公望の心持ちが重なる。

15　鷗辺無黜陟（鷗辺　黜陟（ちゆつちよく）無し）　兼

【式目・平仄】雑、動物鳥（鷗）、水辺用（鷗）。○○○●●。

【句意】鷗の遊んでいるあたりでは、官位の昇進左降といったこととは無縁である。

「鷗辺」の典拠は杜甫の「春日江村五首　其四」「燕外晴絲巻、鷗辺水葉開（燕外に晴絲巻き、鷗辺に水葉開く）」（集千家註分類杜工部集・一〇）によるか。「黜陟」は底本傍書に「進退ゾ」とある通り、功の有無によって官位をあげさげすること。鷗は自由な境涯、俗世との断絶を象徴する鳥で、俗事と無縁であることを意味する。

【付合】寄合語は無いが、前句の渭が水辺であるので、そこに鷗がいる情景として付ける。太公望が卑賤から将相となった故事を、官位の上げ下げを意味する「黜陟」で対比した。

16　ふもとの嵐吹きすつる迠（あと）　長

【式目・韻字】秋（嵐）、山類体（ふもと）。②麓1、②嵐1。「迠」。和訓押韻「迠（カウ）　獣迹　アト」、漢和三五韻「迠（アト）　韻会、獣迹也、字林云、一逸道也」。

【句意】嵐が麓で吹き過ぎていった、その跡。

「ふもとの嵐」を詠んだ和歌には、「ぬる床に吹きまく雲を枕にてのぼる麓のあらしをぞきく」（正徹千首・旅・九〇六）、「すむ人のふもとの嵐あられぬをわかゐる峯の松にかこつな」（草根集・三・一九七三・「旅館嵐」）などがあり、この語が詠まれる時、作中主体は麓より高い場所にいる。「吹きすつる」は吹き過ぎたの意か、「吹きすつるなごりまでこそかなしけれ軒ばの荻の秋の夕風」（玉葉集・雑一・一九四九・よみ人しらず）。連歌の例に「ゆくかたいづこさをしかの声／吹きすつる嵐の跡に月おちて」（永禄六年十二月称名院追善千句・第九白何・八六、八七）もある。

【付合】連珠合璧集「鳥トアラバ、…跡」とあり、「鷗」を鳥として付ける。前句と合わせて考えると、作中主体がいる場所の高低が関係し、麓より高い場所におり、すでに官位とは関係のない世界にいることを意味するか。

17　たえだえの霧にむら立つ松みえて　意

【式目】秋（霧）、聳物（霧）、植物木（松）。

【句意】霧の切れ間切れ間に群がって立つ松が見られる。

「たえだえの霧」から松の木立が見える趣向は、「霧はるる浜名の橋のたえだえにあらはれわたる松のしき浪」（拾遺愚草・中・浜名橋・一九五二）によるか。「むら立つ」は群生する。「こずゑむらだつ松のうすぎり」（看聞日記紙背、応永二十五年十一月二十五日和漢聯句・一〇・慶）。

【付合】連珠合璧集「嵐トアラバ…松」。また「たえだえトアラバ…通路」。

18　秋寺不尋常（秋寺尋常（よのつね）ならず）　需

【式目・平仄・韻字】秋（秋寺）、釈教（秋寺）。②寺1。○●●○◎。「常」。

【句意】秋の寺は常日頃とは異なっている。

「秋寺」は人が少なく、俗塵を遠く離れた場所。「塵労縁底使吾忘、秋寺人稀隔俗談（塵労底（なに）に縁りてか吾をして忘れしむ、秋寺人稀にして俗談を隔つ）」（本朝無題詩・一〇・七四八・古寺即事・藤原通憲）。秋句三句を続けるため敢えて「秋寺」としたか。

【付合】連珠合璧集「寺トアラバ…松が本」とある。

19　鐘破永宵夢（鐘は永宵の夢を破る）　清

【式目・平仄】恋（夢）、夜分（夢）。④鐘1。○●●○○。

「鐘」は、漢和法式に「只一。入相一。釈教一。異名一。以上新式」とあり、一座四句物。「夢」は「大方恋也」（産衣）とあり、恋句となる。

【句意】鐘の音で永い迷いから覚める。

「永宵」は永遠に続くように思われる長夜。前句によって、仏教によって人間の迷妄、無明長夜の闇から悟る意を持つが、来ない男を待つ女にとって夜は永遠に続くように感じられるもので、恋の意も持つ。惟肖得厳の詩に「永宵独坐漏声遅、天末佳人不可期（永宵に独坐し漏声遅し、天末の佳人は期すべからず）」（雲壑猿吟・寄竹隠厳蔵主（竹隠厳蔵主に寄す））とあるのもそれである。これで次の句を呼び込む。

【付合】連珠合璧集「寺トアラバ…鐘」。

20　敷きかへけりな衣手の霜（しも）　旨

【式目・韻字】冬（霜）、恋（敷きかへけりな）、衣類（衣手）、降物（霜）。「霜」。

【句意】袖に置いた露に替わって、降り積もった霜。

「衣手の霜」は袖に置いた霜。夢から醒めたという前句の状況と、起きたら床が涙に濡れ、袖の露が霜に置き替わったという意で付ける。「高砂の尾上の鐘の音すなり暁かけて霜やおくらん」（千載集・冬・三九八・匡房）などによるか。

【付合】連珠合璧集「鐘トアラバ…寺…霜」。また八雲御抄・三・天象部・霜に「かねのこゑ〈鐘は霜に響くなり〉」とある。

21　雪ほどはつもらぬ花の苔むしろ　三

【式目】春（花）、植物木。④花1、④雪2。

雪は、漢和法式・一座四句物に「三、春一。似物ノ一別ニ可有之」とあり、この「雪」は似物、花の比喩である。花は、「花ハ發句、脇、第三の外ハ折の面にせず。裏よりハいづくにても苦しからず」（産衣）とあり、本一座もその規則に従う。

【句意】雪ほどではないが、散った花びらが積もる、苔の莚。

「苔のむしろ」とは、苔が一面に生えたさまを敷物に見立てた表現。雪に替わって花がその上に散り敷いた光景。

【付合】連珠合璧集「莚トアラバ、しく」。前句「敷きかへけ

りな」から「苔むしろ」が導かれている。参考歌に「ちる花を苔のむしろにしきかへてあをねがみねに春かぜぞふく」（為家千首・雑・八三三）が挙げられる。

22　風微桃李場（風は微なり桃李の場）　言

【式目・平仄・韻字】春（桃李）、植物木（桃李）。○○○●◎。「場」。

【句意】風がかすかに吹く、桃や李を植えた園。

「桃李の場」は、黄庭堅「上蘇子瞻（蘇子瞻に上る）」の「紅梅有佳実、托根桃李場、桃李終不言、朝露借恩光（紅梅佳実あり、根を託す桃李の場。桃李終に言はず、朝露恩光を借す）」（山谷詩集注・一）の用例があり、朝廷の園、転じて前途ある秀才を指すが、ここは普通名詞か。

【付合】前句の「花」を桃李の花として詠む。連珠合璧集に、「李トアラバ　雪・はだれ雪」とあり付合となる。「我が園の李の花か庭に降るはだれのいまだ残りたるかも」（万葉集・一九・四一四〇・家持）のように、この雪がまだらに降り積もる雪のことであれば、前句の「雪」の語から「李」が連想される。また、「風微」を前句の句意と重ねて解釈すれば、風が微かにしか吹いていないから雪が積もるように花が散ることはない、となろう。

23　春遊歸計少（春遊帰計少なし）　西

【式目・平仄】春（春遊）。○○○●●。

【句意】春に遊んでいて、家に帰ろうとする考えも持たない。「春遊」は、春に花をもとめて山野を歩いたり、花のそばで宴を張ったりして楽しむ遊興。歌題「野遊」も同じ。「歸計」は、家路につこうとする考え。「争敢三年作帰計、心知不及賈生才（争か敢て三年帰計を作さん、心に知る賈生の才に及ばさるを）」（白氏文集・一六・江亭夕望）。

【付合】「花下忘帰因美景、樽前勧酔是春風（花の下に帰らむことを忘るるは美景に因つてなり。樽の前に酔ひを勧むるは是春の風）」（和漢朗詠集・春興・一八・白居易）によるか。また前句の「桃李場」を仙境に見立てて、帰るのを忘れたとする。「桃李不言春幾暮。煙霞無跡昔誰栖（桃李言はず春幾ばくか暮れぬる。煙霞跡無し昔誰か栖んじ）」（和漢朗詠集・仙家・五四八・菅原文時）とあるように、桃李は仙境に咲く花であった。そこに入り込んだ人間が、楽しさに帰ることを忘れ、いつしか数百年が経過したという故事も想起できる。

24　雲ゐはるかになく夕鶺（ひばり）　仙

【式目・韻字】春（夕鶺）、動物鳥（夕鶺）、時分（夕鶺）。④夕1。「鶺」。和訓押韻「鶺（サウ）　ヒバリ」、漢和三五韻「鶺（ヒバリ）　和名比波里」。

【句意】雲の上はるか高い所から、鳴いている夕暮時の鶺。

【付合】春遊の情景を春の鳥、雲雀に付けた。連珠合璧集には、「春の心　雲雀」「雲雀とあらば、春の野　あがる　をつる…」とある。ここでは雲雀が空高く鳴く余り、夕方になってもなかなか帰巣しないと取りなした。「もえいづる草葉の床やをしからむ焼野に帰る夕ひばりかな」（新撰六帖題和歌・二・春

の野・六六八・知家）。

25　かすむ野の日の色うすみ雨晴れて　　長

【式目】春（かすむ）、聳物（かすむ）、光物（日）、降物（雨）。②雨1。

【句意】霞がかかる野原に日の色がうっすら射し、雨が晴れて来た。

「かすむ野」は、春ののどけさを象徴。「すみれさく道のしばふに花ちりてをちかたかすむ野べの夕暮」（風雅集・春下・二四六・従三位親子）がある。「日の色」は、陽光。霞によって日の色が薄いとした作例は同時代には「山の端の霞におつる日の色ものこるやうすき空の月影」（時慶集解題・九）があるが、直接には長恨歌の「峨嵋山下少人行、旌旗無光日色薄（峨嵋山下人の行くこと少なり、旌旗光無く日色薄し）」（白氏文集・一二）により生まれた表現か。「霞のうへにうつる日のかげ／なきたつもはるかになれる夕ひばり」（永禄元年三月花千句・第七三字中略・三八・昌益、三九・仍景）は、「夕鶫」「はるかに」「霞」「日の影」が詠まれて類似する。

【付合】霞に隠され姿は見えないが、かすかに雲雀が鳴くのが聞こえる情景。「春ふかき野べの霞のした風にふかれてあがる夕ひばりかな」（六百番歌合・春二・十七番右・雲雀・信定・九四）などがある。

26　分け行くさとにつゞくむら篁（たけ）　　茂

【式目・韻字】雑、旅（分け行く）、居所体（さと）、植物竹（むら篁）。「篁」。和訓押韻「篁（タウ）タケ」、漢和三五韻「篁（タケ）　韻会、―篁ハ竹ノ名、〇竹ニ仮用」。

【句意】（野から）里に分け入ると、道なりに続いている叢竹。

「分け行くさと」は、旅の途中さしかかった集落。そこに竹が群生するとは、蘇軾「留題峡州甘泉寺（峡州の甘泉寺に留題す）」詩、「古人飄何之、惟有風竹鬧、行行翫村落、戸々懸網罩（古人、飄として何くにか之く、ただ風竹の鬧（さわ）がしき有り、行き行きて村落を翫べば、戸々に網罩を懸く）」（東坡先生詩集・二三・寺観）によるか。

【付合】前句の「野」に「分け行く」が関係するが、そのほかは付合となる語がない。

27　景落畫工手（景は畫工の手に落つ）　　需

【式目・平仄】雑、人倫（畫工）、●●〇〇●。

【句意】この情景は画工の手のうちに落ちる。

「畫工」は絵描き。「落手」は、手のうちに落ちる、思いのままになる意。「何乃明妃命、独懸画工手（何の明妃の命、独り画工の手に懸けむや）」（白氏文集・二・青塚）。

【付合】前句を絵画に取りなす。所謂「胸中に成竹あり」、竹を描く際、画家は胸中に構図を浮かべてから筆をとる意。蘇軾の「文與可畫篔簹谷偃竹記（ぶんしかえがくうんとうこくえんちくき）」に「故畫竹必先得成竹於胸中、執筆熟視、乃見其所欲畫者、急起従之（故に竹を画くには必ず先ず成竹を胸中に得て、筆を執りて熟視す。乃ち其の画かんと欲する所の者を見て、急ぎ起ちて之に従ふ）」（東坡全集・三六。古今事文類聚・前集・四二にも収める）とある。前句の韻字

「簣」から、この記を連想させるのはたやすい。文與可は北宋の文人文同（一〇一八～七九）のことで、蘇軾の従兄に当たる。好んで水墨で竹を描き、「墨竹画」の流行のきっかけを作った人物である。

28　山彰金佛相（山は金佛の相を彰す）　続

【式目・平仄・韻字】雑、山類体（山）、釈教（金佛）。○○○●◎。「相」。

【句意】山は金色佛の相をあらわにする。

「金仏相」は仏の三十二相の一つ金色相のことで、身体手足全て黄金色に輝くさまであろう。

【付合】これも同じく蘇軾の詩「贈東林総長老」の一節によって付けたか。「渓声便是広長舌、山色豈非清浄身（渓声は便ち是広長舌、山色は豈に清浄身に非ざるや）」（東坡先生詩集・一九・仙釈）、「谷川の音は法を説く釈尊の声、山の姿は仏の清浄な御身に他ならない」の意。前句の主張を敷衍していることになろう。「山色豈非清浄身」の句は碧巌録三十七則にも取られて人口に膾炙した。

29　を初瀬やくるとあくとの鐘の聲　旨

【式目】雑、山類体（を初瀬）、名所（を初瀬）。④鐘2。

【句意】この小初瀬では、暮れても明けても、鐘の音が響く。

「を初瀬」は「初瀬」に美称「小」を冠したもの。大和国の著名な歌枕で、長谷寺がある。朝晩の「鐘」を詠み込む歌は多く、「夕霧に梢も見えず初瀬山入相の鐘の音ばかりして」（詞花集・秋・一一二・兼昌）、「春の夜は明け行く鐘のひびきまで花に霞める小初瀬の山」（文保百首・一四・忠房）など。「くるとあくと」は日が暮れても夜が明けても。「くるとあくとめかれぬものを梅の花いつの人まにうつろひぬらむ」（古今集・春上・四五・貫之）。

【付合】長谷寺の本尊は金色十一面観音であることが、前句「金佛」と付いている。

30　月にはげしき秋の川颪（かぜ）　意

【式目・韻字】秋（秋・月）、夜分（月）、光物（月）、水辺体（川）。「颪」。和訓押韻「颪（リヤウ）　北風、只風トモ」。漢和三五韻「颪（キタカゼ）　説文　北風謂二之一一、集韻　或ハ作颱、かぜトモ用」。

【句意】月の光の下、激しく吹きつける秋の川風。

【付合】「を初瀬」から「はげしき」。「うかりける人を初瀬の山おろしよはげしかれとは祈らぬものを」（千載集・恋二・七〇八・源俊頼）による。28から「山類」の句が続いたのでこの句で転じを試みたか。

31　冷袖舟先繫（冷袖　舟　先づ繫く）　俊

【式目・平仄】秋（冷袖）、衣類（袖）、水辺外（舟）。○●○○●。

【句意】袖が冴えて来て、まずは港に舟を繋いだ。

「冷袖」は、杜牧の「阿房宮賦」に「歌台暖響、春光融融、舞殿冷袖、風雨凄凄（歌台の暖響は、春光融融たり、舞殿の冷袖は、風雨凄凄たり）」（古文真宝後集・上）があり、これを典拠

とするか。

【付合】連珠合璧集「河トアラバ、…舟」。阿房宮賦により、風の激しさを受けて冷袖を出した。「舟よするをちかた人の袖みえて夕霧うすき秋の川浪」（続拾遺集・秋上・二七七・宗尊親王）の表現にも通ずる。

32　露盤玉已瑳（露盤　玉　已に瑳たり）　咲

【式目・平仄・韻字】秋（露盤）、降物（露）。④玉1。●○●●◎。「瑳」。

【句意】承露盤には、玉のような露がもう音を立てんばかりに置いている。

「露盤」は金茎承露盤の略で、漢の武帝が建章宮内に建てた銅盤。仙人の手のひらをかたどり、この盤にたまった上天の精である露を飲むと長寿を得るとされた。「瑳」は玉が触れて鳴る音の形容。玉のような露がびっしり置いたさま。

【付合】前句が秦の始皇帝、本句が漢の武帝、意識して帝の建てた建造物で対句に揃えたか。

33　浮くなみだまぎれやするの亂碁に　　仙

【式目】雑、恋（浮くなみだ）。

「なみだ」は、「産衣」に依ると七句去也。人の泣二句也。」と規定される。

【句意】なみだする気持ちが紛れるかと亂碁をするの。

「亂碁」は、ちきり・みだれご・らご・らんご等と読み、碁石または小石を用いてする遊び。指の先につけて拾い取り、多くを得たものを勝ちとするという。中世の賭博によく用いられた。「まぎれ」とは、心のしこりや結ぼれた思いを、他のことでつい忘れるという意。

【付合】連珠合璧集に「玉トアラバ…涙」とある。前句の承露盤の「盤」の字を碁盤としてとりなした。源氏物語・手習巻に「苦しきまでもながめさせ給ふかな、御碁をうたせたまへといふ、いとあやしうこそはありしか、とはのたまへど、打たむとおぼしたれば、盤とりにやりて…」とある。薫と匂宮との板挟みとなり、川に身を投じた浮舟は図らずも助かってしまい、彼女の看病をしていた少将の尼が、ふさぎこむ浮舟に、慰めに碁を勧める場面で、浮舟は「心には秋のゆふべをわかねどもながむる袖に露ぞみだるゝ」と詠む。露は涙で思い乱れた心を表現。碁が乱れた心の慰めや癒しとして機能した、この場面を下敷きにしたかと思われる。

34　淡燈照獨床（淡燈　獨床を照らす）　清

【式目・平仄・韻字】恋（独床）、夜分（床）、居所体（床）。①床1、③燈1。○○●●◎。「床」。

「床」は産衣に「一也。夜分也。居所の體也。ゆかハ折也。夜分ニ非ず。ゆかならバ毎にかなに書くべしと也。共ニ床の字をよめり。居所也」とあるので、居所で一座一句物。

【句意】淡い燈火が、獨り寝の床を照らしている。

「獨床」は、一人寝の夜を意味するが、「独夜」「独臥」「独寝」といった熟語はあるのに、用例希である。押韻のためか。

【付合】竹馬集「碁…ともしび」。源氏物語・空蟬巻に「灯近

うともしたり」とあるのは、源氏が空蟬と軒端荻とが碁を打つのを垣間見する場面である。空蟬が床から逃げ出した後は、「君は入りたまひて、ただひとり臥したるを心やすく思す。」と、軒端荻が残され、一人で臥す描写となる。恋人がいない独り寝の夜の寂しさとなる。床が淡い燈火によって照らし出されていることでその切なさが際立つ。

35　童眠書儘擲（童眠りて　書　儘擲つ）　続

【式目・平仄】雑、人倫（童）。③書1。○○○●●。漢和法式の一座三句物に「文〈恋一、旅一、学文ニ一〉」とあり、学問（文）の「書（ふみ）」に宛てた。

【句意】童は眠ってしばしば書物を取り落とす。

「儘」は「尽（ことごとく）」の意だが、底本「まま」と傍訓する。和語「間々」に宛てたか。「陪筵儘促詩（筵に陪しては儘詩を促す）」（慶長九年九月和漢千句第五・三二・周洪）も同じか。

【付合】随葉集「灯かゝぐるには…学び」。前句、床の傍らに置かれている「燈」を、書斎に燈す「書燈」としてとりなし、苦学する童が眠ってしまい、しばしば書物を取り落とすさまを言うか。

36　道のをしへぞうたゝ忘るゝ　三

【式目・韻字】雑。「忘」。

【句意】道の教えをいよいよ忘れてしまう。

「道のをしへ」は儒学などの道徳的な教誡。「うたた」は状態がいっそうはなはだしくなる意。ますます。

【付合】前句の「眠」から、「うたゝ」に「うたた寝」も懸けるか。「たらちねの親のいさめしうたた寝はもの思ふときのわざにぞありける」（拾遺集・恋四・八九七・よみ人知らず）、「そむくものから子はあはれなり／聞きいれぬ道のをしへのたびたびに」（天文廿四年正月梅千句・第一何木・三四、三五）にも、「親のいさめ」を聞かない子の姿が詠まれる。前句の句意と合わせて考えると、書物を擲ってしまったから、親の教誡、すなわち人の道をますます忘れてしまう、となる。

37　さきだつる行衛をたどり山くれて　意

【式目】雑、旅（行衛をたどり）、山類体（山）、時分（くれて）。

【句意】先に立てた案内人が示した方向を辿っていくうち山中は暮れてきた。

「さきだつ」は、ここでは道を案内して先に立つ人をいう。「行衛（行方）」とは、目指し、進んでいく方向のこと、行った方向のことである。

【付合】前句を山中の道にとりなし、案内人にはぐれ教えられた道を忘れて迷ってしまったとする。

38　眞柴こる男のかへるかた岡　旨

【式目・韻字】雑、人倫（男）、山類体（片岡）。②男1、②岡1。「岡」。

【句意】柴を伐る山男が帰っていく片岡。

「真柴」は柴の美称。「こる（樵る）」とは、枝を切ること、また株を残して立木を切ることを言う。「真柴こるしづの爪木と名乗らせて我人しらぬ思ひにぞたく」（新続古今集・恋一・一〇四五・俊成）のように、「真柴こる」は、賤しい山男を形容する表現。「片岡」とは、裾の一方が他方より長く、なだらかに傾斜した岡のこと。

【付合】前句「山くれて」から、柴を刈ってきた男が帰ってきた夕暮れの片岡の情景で付ける。

39　花雖幽處美（花は幽處と雖も美なり）　咲

【式目・平仄】春（花）、植物木（花）。④花2。○○○●●。

【句意】花は、山奥で静かなところであっても、美しい。

「幽處」は、奥まった静かなところ。「曲徑通幽處、禅房花木深」（曲徑は幽處に通ず、禅房の花木深し）（三体詩・三・常建「題破山寺後禅院」）によるか。

【付合】38句で、樵夫が柴を刈って帰っていると、ふとひらけた一本の道が幽處への入り口となり、開けた先で花が美しく咲いている情景を詠む。その発想は、古今集・仮名序「大伴黒主はそのさまいやし。いはば、薪おへる山人の、花の陰にやすめるがごとし」によるか。黒主の和歌を批判するための譬喩であるが、中世には黒主が志賀明神に祀られたこともあり、この句も愛好された。謡曲「志賀」にも転用されている。

40　杏在遠村粧（杏は遠村に在りて粧ふ）　需

【式目・平仄・韻字】春（杏）、居所体（遠村）。②村1。●●●○◎。「粧」。

【句意】杏の花は遥か遠くの村に咲き誇っている。

「遠村」とは、遠方にある村。この句の典拠として、杜牧「清明」詩の「借問酒家何處有、牧童遙指杏花村（借問す酒家は何處にか有ると、牧童は遙かに指したり杏花村）」（分門纂類唐宋時賢千家詩選・三・清明）の一節があろう。さらに宋の張鎡（功父）の詩句にも「梨花風骨杏花粧（梨花の風骨、杏花の粧）」（詩人玉屑・二・詩評）とある。

【付合】開けた道の先に咲く眼前の花から視線を移し、遠くの方に見える村とそれを彩る杏花の景色を詠んだ。

41　おもふどちまどひにあかぬ春なれや　茂

【式目】春（春）。「おもふどち」は、無言抄・産衣に「人倫ニあらず」とある。

【句意】友人たちと団欒することに飽きることがない春であることよ。

「どち」は同士、仲間の意で、仲のよい友だちどうし、気の合った仲間、「梅の花今盛りなり思ふどち挿頭にしてな今盛りなり」（万葉集・五・八二〇・葛井大夫）。「円居」は親しい者同士の楽しい集まり。「思ふどちまどゐせる夜は唐錦たたまくをしき物にぞありける」（古今集・雑上・八六四・よみ人知らず）もある。

【付合】「大庾嶺之梅早落、誰問粉粧、匡廬山之杏未開、豈趁紅艶（大庾嶺の梅は早く落ちぬ、誰か粉粧を問はむ、匡廬山の杏は未だ開けず、豈に紅艶を趁めんや）」（和漢朗詠集・柳・一

○六・江納言）による。そして杏から梅を連想して万葉集・古今集の詞を導いたか。

42　溪流飛羽觴（溪流　羽觴を飛ばす）　続

【式目・平仄・韻字】雑。水辺外（溪流）。○○○●◎。「觴」。

【句意】谷のせせらぎに流した盃を盛んに酌み交わす。

「溪流」は谷川の流れ。「觴」は雀の形をした杯。「羽觴を飛ばす」とは、杯のやりとりを盛んに行うこと、酒宴のさま。李白の「春夜宴桃李園序（春夜桃李の園に宴するの序）」、「会桃李之芳園、序天倫之楽事、群季俊秀、皆為恵連、吾人詠歌、独慚康楽、幽賞未已、高談転清、況開瓊筵以坐花、飛羽觴而酔月（桃李の芳園に会して、天倫の楽事を序す、群季の俊秀なるは、皆恵連たり、吾人の詠歌、独り康楽に慚づ、幽賞未だ已まず、高談転た清し、況や瓊筵を開きて以て花に坐し、羽觴を飛ばして月に酔ふ）」（古文真宝後集・三）による。

【付合】李白の春夜宴桃李園序に導かれて、春の円居に集っての団欒から、曲水宴の光景を連想。一条兼良の公事根源にも、「曲水宴は、周の世より始まりけるにや。文人ども水の岸になみゐて、水上より盃を流して、我が前を過ぎざるさきに、詩を作りて、其の盃を取りて飲みけるなり。羽觴を飛ばすなどいふも此の事なるべし」とあり、「羽觴を飛ばす」を曲水宴に結びつけ用いている。

43　もらさじとかけしを君の恵にて　三

【式目】雑、人倫（君）。②君1。

【句意】君主の恵みが、誰一人もらすまいと施された。

「もらさじ」は民衆を救恤の手から洩らすまいの意で、「時しあれば民の草葉をもらさじと恵の露を君やかくらん」（年中行事歌合・賑給・三二・丹波嗣長）によるか。年中行事歌合は南北朝時代の成立であるが、兼続が寿三（元齋）に編纂させた、古典和歌の注解書である師説撰歌和歌集にも取り上げられており、当時広く知られた故実書でもあった。

【付合】前句での盃に注がれた酒を「もらさじ」と取る。さらに年中行事のつながりから「賑給」を連想したか。「賑給」とは、「賤しき民に米塩などを給ふことなり」（公事根源）、朝廷が困窮者や病人に対して国家が衣料品や食糧を支給する制度、またはその行為を指す。

44　しもがしもまで人ぞ惶（おそ）るゝ　仙

【式目・韻字】雑、人倫（人）。「惶」。和訓押韻「惶（クワウ）（タソル、）」、漢和三五韻「惶（タソル、）、説文、恐也」とある。

【句意】身分の低い下の、そのまた下の者まで、あらゆる人が懼れ畏まる。

「しもがしも」は、身分の最も卑しい者のことで、源氏物語に見られる語。源氏が夕顔の隠れ住む宿を尋ねる場面、「かの下が下と、人の思ひ捨てし住ひなれど、そのなかにも、思ひのほかにくちをしからぬを見つけたらばと、めづらしく思ほすなりけり」（夕顔巻）とある。

【付合】主君の恩恵が世に行きわたるのを、下々の民まで恐懼すると受けたか。

45　矮屋難推暑（矮屋　暑を推し難し）　清

【式目・平仄】夏（暑）、居所体（矮屋）。④屋1。●●○○●。

【句意】この小さなあばら屋では暑さもなかなか去らない。

「矮屋」は、低く小さい家屋、南宋・楊萬里の「午熱登多稼亭詩（午熱多稼亭に登る詩）其一」に「矮屋炎天不可居、高亭爽気亦元無（矮屋炎天居るべからず、高亭爽気亦た元より無し）」（誠齋集・九）とある。随葉集にもこの詩を引用して、「一、あつき日には、せばき庵　錦繡段詩、矮屋炎天不レ可レ居、矮屋、せばき家也」とある。「推暑」は、寒暑が互いに取って変わり季節が進行するさま。周易・繋辞下傳・五章「寒往則暑来、暑往則寒来、寒暑相推而歳成焉（寒往けば則ち暑来り、暑往けば則ち寒来り、寒暑相推して歳と成る）」による。

【付合】前句に引用した、源氏の夕顔巻により「しもがしもまで」と「矮屋」が付く。

46　密雲奈隔郷（密雲　郷を隔つるをいかん）　俊

【式目・平仄・韻字】雑、聳物（密雲）、居所体（郷）。②郷1。●○●●◎。孤平。「郷」。

【句意】厚い雲は里から遠く隔たっておりどうしようもない。

「密雲」は、雲が厚く重なっているが、まだ雨の降らない状態。周易・小畜卦「密雲不雨、自我西郊（密雲あれど雨ふらず、我が西郊よりす）」による。

【付合】前句と対句。狭い家に暑さが籠もるとしたのを受けて、同じ周易により、厚い雲が出て夕立になりそうだが、まだ集落からは遙か彼方に見えるとした。

47　かへりみる跡遠ざかる旅の空　長

【式目】雑、旅（旅の空）。②旅1、④空1。

【句意】振り返ると通ってきた道が遥かに遠ざかる、この旅の空。

「跡」は、自分の通ってきた道の意。「旅の空けふはおぼえず遠くきぬ跡おふ嵐くだる山路に」（草根集・六・四九四六・旅宿嵐）。

【付合】連珠合璧集に「旅トアラバ、故郷」とあり、「郷」を故郷に転ずる。雲が通り過ぎた跡に懸かるという趣向は「山遠雲埋行客跡、松寒風破旅人夢（山遠くしては雲行客の跡を埋む、松寒くしては風旅人の夢を破る）」（和漢朗詠集・雲・四〇四）による。

48　浪よりなみにこぐ奥津艘（おきつぶね）　意

【式目・韻字】雑、旅（奥津艘）、水辺用（浪）、水辺外（奥津艘）。「艘」。和訓押韻「艘（クワウ）」。漢和三五韻「艘（フネ）、説文ニ艘一也、艘ハ呉、大舟ノ名」とある。

【句意】波から波に渡るように漕いでいく沖合の舟。

「奥津艘」は、沖に出ている舟。「浪よりなみに」の表現は、実隆の「島もあらはまかいてみはや月の行く浪より浪の末のしら雲」（再昌・三・寄月眺望・二〇四）がある。

【付合】連珠合璧集「旅トアラバ、…舟路」。航跡を顧みる趣向は「世の中をなににたとへむあさぼらけこぎゆく舟のあとの

しら浪」（拾遺集・哀傷・一三二七・沙弥満誓）に基づく。

49　更深月寒冱（更深けて月寒く冱ゆ）　需

【式目・平仄】冬（寒）、夜分（更深・月）、光物（月）。○○●○●。

【句意】夜が更けて、月光は寒気のなか澄み切っている。

「冱」は水がかたく凍てついて、こごえるように冷たいこと。

【付合】連珠合璧集「月トアラバ…舟」、但し付合ははっきりせず、かつ和句であっても句境に差がない。ここまで漢和が均衡していたが、二折裏では48句までに和句が七句出ており、49・50は漢句とせざるを得なかったのかも知れない。

50　日昇峯近望（日昇つて峯近く望む）　咲

【式目・平仄・韻字】雑、光物（日）、山類体（峯）。●○○●◎。「望」。

【句意】日が昇って、峰が近くに眺められる。

【付合】前句で夜分に照る月と対比させ、夜明けに昇る日を詠む。

51　霞もや山かた分けて晴れけらし　旨

【式目】春（霞）、聳物（霞）、山類体（山）。

【句意】霞もまた、山を二つに分けるように晴れたことだよ。

「霞もや」とは、霞もまた～だなあ、の感歎。「霞もやあけゆく空ををしむらん心ぼそげにたちわたるかな」（六百番歌合・春曙・経家・一一〇）。「かた分く」は、二つに分けるの意。陽光が射す所射さない所があるのを表現する用例が同時代にある。「夕日影かた分けてさす片岡はおなじもみちの色そなをこき」（江雪・岡紅葉・二四七）、「はれわたる日影ながらもかた分けて時雨や雲をまたさそふらん」（邦房親王御詠・時雨雲・一五三七）。

【付合】前句では、明け方の山中、麓は見えず、峯が見えるという状況に、霞もまた山の片側から晴れて来たと付けた。

52　ほのかにかへる鴈の一行　長

【式目・韻字】春（かへる鴈）、動物鳥（鴈）。②鴈2。「行」。和訓押韻「行　雁ノ一―書ノ一―ニ用也」。

【句意】かすかに姿を見せて帰って行く一列の雁。

「雁の一行」は、雁の編隊の形。「ほのかにかへる」は、「朝ぼらけ霞のひまの山のはをほのかにかへる春のかりがね」（続拾遺集・雑春・四八六・経家）によるか。

【付合】「霞」から「ほのか」に付ける。霞の間から一列となって北に帰る雁の姿が遠望できるとした。

53　塵裡負春客（塵裡春に負く客）　続

【式目・平仄】春（春）、旅（客）、人倫（客）。○●●○●。

孤平。旅の句は五句去りで48句から四句しか隔てず式目に反する。

【句意】俗世にあって、春を見捨てて流浪する旅人。

「塵裡」とは俗にまみれた生活。「負春」は、春を見捨てること。「如今老病須知分、不負春来二十年（如今老病すべからく

分を知るべし　春を負(そむ)かざりてこのかた二十年」（白氏文集・五六・老病）。「客」は、家郷をはなれて異地に在る人がみずから指して言う。

【付合】鴈→客。「春霞立つを見捨ててゆく雁は花なき里にすみやならへる」（古今集・春上・三一・伊勢）により、前句では春に帰るのは雁、本句では旅人とし、美しい春を見捨てて帰る雁と、華やかな世に背を向けて流偶する身の上を重ねるか。

54　朝来下殿嬙（朝来　殿を下る嬙）　清

【式目・平仄・韻字】恋（句意）、時分（朝来）、居所体（殿）、人倫（嬙）。②朝1。○○●●◎。「嬙」。なお漢和法式では「女」は一座一句物。

【句意】朝が来て、宮殿を去る女官。

「朝来」は朝になって。「嬙」は、「をんなめ　説文婦官也」（漢和三五韻）とあるように、宮殿で一夜を過ごし朝に退出する女官を指すが、「殿を下る」は、杜牧「阿房宮賦」の一節、「妃嬪、媵嬙、王子、皇孫、辭樓下殿、輦来於秦、朝歌夜絃、為秦宮人（妃嬪・媵嬙・王子・皇孫、楼を辞し殿を下りて、輦して秦に来る、朝歌夜絃し、秦の宮人となる）」（古文真宝後集・一）が重ねられる。秦に滅ぼされた戦国六国の貴人たちが連行され、秦の宮廷に仕えたことをいう。

【付合】帰雁・旅人と、なじみの場所を後にする情景が続いたが、この句では後宮の女官が朝に退出する様子を「下る」で表現する。前句の「客」を受けて、女官が秦に迎えられた亡国の「客」であると見るか。

55　僞眞難辨約（僞眞辨じ難きは約）　咲

【式目・平仄】恋（句意）。●○○●●。

【句意】男女の契りは、真か偽か判別することは難しい。

【付合】前句を、かねて契りを結んだ女が宮殿に召されて退出して来た場面にとりなし、約束が守られるか否か、眞偽は判断し難いものだ、という男の慨嘆とした。

56　あひおもふにもつらき妨(さまたげ)　三

【式目・韻字】恋（あひおもふ）。「妨」。

【句意】互いに思う仲にもつらい妨げがある。

「つてにきく契もかなしあひ思ふ梢の鴛鴦のよなよなの声」（拾遺愚草・上・三九九）。定家のこの歌は、「相思樹」の故事を念頭に置いたものである。捜神記・一一「相思樹」（韓憑夫婦）では、宋・康王が家来の韓憑の妻の美しさに恋慕し、韓憑は獄中で自殺した。妻は王と共に楼台に登った折に身を投げて夫の後を追った。妻の帯に挟まれていたという遺書には「願以屍骨、賜憑合葬（願はくは屍骨を以て、憑に賜ひて合葬せしめよ）」とあったが、王は許さず離れたところに埋葬させた。離れていた二人の墓からは木が生えて絡まりあい、樹上では番いの鴛鴦が悲しく鳴いていた、というものである。当句での「妨」は康王が思い合う夫婦の墓を離したことを指すか。

【付合】契っても真偽は判断し難いのが、相思相愛の仲にも障害となっているとした。

57　露間疎影月（露間疎影の月）　俊

【式目・平仄】秋（月）、夜分（月）、光物（月）、降物（露）。●○○●●。

【句意】ほんの僅かの間、まばらな枝からさしこむ月影。

「露間」は、露が結ばれて消えてしまうまでのつかの間の意であり、和語「つゆのま」を漢字表記したか。「ぬれてほす山路の菊の露の間にいつかちとせを我はへにけむ」（古今集・秋下・一七三・素性）。「疎影」は、枝もまばらな樹木の影、とくに梅の枝を言う。張鼎「僧舎小池」詩の「冷光揺砌錫、疎影露枝猿（冷光砌錫に揺れ、疎影枝猿を露す）」（三体詩・三）。しかし、これは樹木ではなく、荒廃した家の屋根の隙間から、月光が板敷を点々と照らすさまであろう。「やへむぐらしげれる宿は人もなしまばらに月の影ぞすみける」（新古今集・雑上・一五五三・匡房「あひしりて侍りける人のもとにまかりたりけるに、その人ほかにすみて、いたうあれたるやどに、月のさしいりて侍りければ」）によるか。漢句の表現が、和歌に典拠を求めている例である。男女の関係の疎遠なことも響かせるか。

【付合】「露間」と「疎」という語から前句と合わせて解釈すると、月は男の比喩で、一瞬逢いに来たかと思ったがあっという間にいなくなってしまう、ということで付く。

58　秋の田づらの行くかひも亡（な）し　茂

【式目・韻字】秋（秋）。「亡」。和訓押韻「亡（バウ）（ナシ　ウシナフ）」、漢和三五韻「亡（ボウ）（ナシ　ホロブシ　ウシナフ）」。

【句意】秋の田の辺りにはもはや行く甲斐もない。

「田づら」は、田の面と同じ。田のあたり、ほとり。「うちわびて落穂拾ふと聞かませば我も田づらにゆかましものを」（伊勢物語・五八段）による。

【付合】前掲の伊勢物語五八段には「昔、心つきて色好みなる男、長岡といふ所に家つくりてをりけり。そこの隣なりける宮ばらに、こともなき女どもの、田舎なりければ、田刈らんとて、この男のあるを見て、いみじのすき物のしわざや、とて集まりて入り来ければ、（中略）この女ども穂ひろはむといひければ」とある。男が稲刈りをしようとした時の、近くの女とのやりとりである。男の和歌は「あなたたちが貧乏で落穂拾いをすると聞いていたならば、私も田に出てあげましたものを」という意。前句が女の荒れた家の描写とすれば、伊勢物語によって、男はもはや田に出ることもない（女に言い寄ることもない）、と応じたものか。

59　やゝ寒き伏見の野邊のくるゝ夜に　意

【式目】秋（やゝ寒き）、名所（伏見）、時分（くるゝ夜）。①やや寒き1、②野邊1。

【句意】うすら寒い伏見の野辺で日が暮れて。

「やや寒き」は、「やや寒きをののあさぢの秋風にいつよりしかのなきはじめけん」（続古今集・秋下・四三八・資季）など、秋の歌に用いられる。「伏見の野辺」は、大和国の歌枕。「かりそめに伏見の野辺の草枕露かかりきと人にかたるな」（新古今集・恋三・一一六五・よみ人知らず）による。「くるゝ夜」は「時分也。夜分ニ非ず」（産衣）とあり、夕方でとる。

【付合】「田面」と「伏見」が、「伏見山松のかげよりみわたせ

ば明くる田面に秋風ぞ吹く」（新古今集・秋上・二九一・俊成）により付く。但し、俊成歌の「伏見山」は山城、「伏見の野辺」は大和で、同一視されている。

60　風のまゝなるするゑの篁（たかむら）　旨

【式目・韻字】雑、植物竹（篁）。「篁」。和訓押韻「篁タケ（クワウ　タカムラ）」、漢和三五韻「篁タカムラ　タケ」説文　竹田也、一曰竹名」。

【句意】風にまかせて吹かれている竹林の果てのあたり。

「篁」は、竹の群がって生えているところ、竹の林のこと。押韻のために用いたもの。

【付合】連珠合璧集「竹トアラバ、…伏見里」、「夢かよふ道さへたえぬ呉竹の伏見の里の雪の下折れ」（新古今集・冬・六七三・有家）に基づく。

61　関寂鳥知楽（関寂　鳥　楽しみを知る）　需

【式目・平仄】雑、述懐（関寂）、動物鳥（鳥）。④鳥1。●●●○●。孤平。

【句意】閑寂の境地、鳥は楽しむことを知る。

「関寂」は、「関寂（クヮンセキ）」は人気がなくひっそりとしていて寂しいこと。杜甫の「暮登四安寺鐘楼寄裴十（暮に四安寺鐘楼に登り裴十に寄す）」に「多病獨愁常関寂、故人相見未従容（多病獨り愁て常に関寂たり。故人相見て未だ従容せず）」（集千家註分類杜工部集・九）。

【付合】前句の「竹」を受けて、竹林七賢のような脱俗の隠者の境涯を導く。もう一つ、「阮籍嘯場人歩月、子猷看處鳥栖煙（阮籍が嘯く場には人月に歩む、子猷が看る處には鳥煙に栖む）」（和漢朗詠集・竹・四三一・章孝標）があろう。「王子猷がいつも見ていた所（竹藪）には、鳥が煙の（ような竹林の）中に隠れ棲んでいる」という意である。王子猷は竹を熱愛したが、鳥は関係ない。しかしこの句は、徒然草一二一段に「王子猷が鳥を愛せし、林に楽しぶを見て、逍遙の友としき」と引用されるように、鳥も竹に住むことから隠賢の友になる、と飛躍して理解されていたらしい。

62　聯翩蝶似狂（聯翩　蝶　狂するに似たり）　咲

【式目・平仄・韻字】春（蝶）、動物虫（蝶）。○○●●◎。「狂」。

【句意】今にも落ちそうに飛んでいるさまは、蝶がまるで狂ったようだ。

「聯翩」とは、つづいて絶えないさま、今にも堕ちそうなさま。「浮藻聯翩、若翰鳥罹繳墜曾雲之峻（浮藻聯翩たり、翰鳥の繳に罹って曾雲の峻しきより墜つるがごとし）（和漢朗詠集・文詞付遺文・四七〇・文賦・陸士衡）。

【付合】「帰渓歌鶯、更逗留於孤雲之路、辞林舞蝶、還翩翻於一月之花（渓に帰る歌鶯は、更に孤雲の路に逗留し、林を辞する舞蝶は、還て一月の花に翩翻たり）」（和漢朗詠集・閏三月・六〇・源順）か。しかし「聯翩」を文選の李周翰注は「鳥の飛ぶ貌」とする。前句と対句を成し、鳥の飛ぶ様から「聯翩」を用いたか。

63　花さくはすみれまじりのくさむらに　　仙

【式目】春（すみれ）、植物草（すみれ・くさむら）。

【句意】花が咲いているのは、菫が点在する叢であって。「すみれまじり」は、「しばしとて出で来し庭も荒れにけり蓬のかれ葉すみれまじりて」（拾遺愚草・上・三一〇）の如く、しばしば荒廃した住居の垣根を形容する。

【付合】蝶と花、または蝶と草むらで付く。連珠合璧集「蝶トアラバ、こてふ　夢　花その」、随葉集「蝶のあそぶには、…草むらのかげしづか」など。

64　霞融詩債償（霞融して詩債償ふ）　続

【式目・平仄・韻字】春（霞）、聳物（霞）。○○○●◎。「償」。

【句意】春になり霞が立つと、詩を賦して借りを返した。「霞融」は霞の立ちこめるさま。「詩債」は、贈られた詩に酬答しようとして果たさないこと。作るべき詩を作らないこと。転じて感興に突き動かされて詩を完成させることを、前世で詩を作らなかった故に現世でその負債を返していると喩えた。晩唐の司空図「白菊雑書四首」詩に「此生只是償詩債、白菊開時最不眠（此の生只だ是れ詩債を償ふのみ、白菊開く時最も眠られず）」（司空表聖詩集・五）がある。

【付合】司空図の詩を踏まえれば、前句で菫の花が咲く春の叢の光景に感じて詩を作ったと解せるが、決定的なつながりが見つからない。

65　けふもたゝ酒のむしろにくらしはて　　長

【式目】雑。②けふ1、③酒1、②筵2。「筵」は連歌新式に「只一。法の莚などに一。苔莚・草莚など此中に可用之」とある。21句に「苔筵」があった。

【句意】今日もひがな一日ただ酒を飲んで日暮れまで過ごしてしまう。

「酒のむしろ」は酒席。「口びるの笑や詞に出でぬらむ／酒のむしろはあかぬかたらひ」（竹林抄・雑上・一二二〇・賢盛）。

【付合】「仙人輙飲我以流霞一杯、数月不饑（仙人輙ち我に飲まするに流霞一杯を以てす、数月饑へず）」（論衡・道虚）とあるように、仙人が飲む酒を「流霞」といい、連珠合璧集「酒トアラバ…ながるゝ霞」とある。また拾花集「酒には、つくる詩」ともある。

66　市のかりやにとまる賈（あきびと）　了意

【式目・韻字】雑、居所体（かりや）、人倫（賈）。④屋2。

「賈」。和訓押韻に「賈（シャウ）―賈（アキヒト）」、漢和三五韻にも「賈（アキヒト）」とある。「上杉家文書」などで「賈」と翻刻するが、これは別字。

【句意】市の仮小屋に宿をとる商人。

「市のかりや」は市場の仮小屋のこと。中世の市場には常設の建造物がなかった。

【付合】随葉集「酒を酌みかはすには、…市のかり屋」。謡曲「松虫」（世阿弥作）で、阿倍野市で酒を売る商人が、毎日酒宴をする男たちを「市の屋形」に迎えて引き留める。「われこの阿倍野の市に出でて酒を売り候ところに、いづくとも知らず

若き男のあまた来たり酒を飲み。帰るさには酒宴をなして帰り候。…今に知られて市屋形に樽をする盃を並べて。寄り来る人を待ちゐたり」とある。このような物語を取り入れたものか。連歌の作例は「なれなれてくむさかづきのいくめぐり／かりやのうちにつどふ市人」（天正九年十一月五吟一日千句第六山何、二七、二八）があり、同時代の今川氏真の和歌、「帰るさをわするゝ酒のむしろかな市の屋かたも月のかり屋に」（今川氏真詠草・市中月・六二〇）も、この物語に基づき、月も市に宿を借りたとする趣向で、表現も酷似している。なお「松虫」は豊臣秀次の命で編纂された謡抄でも取り上げられ、談義の場に西笑承兌も居た（言経卿記文禄四年四月二日条）。

67　ふりきぬる雨の氣色を三輪が崎　三

【式目】雑、降物（雨）、水辺体（三輪が崎）、名所（三輪が崎）。②雨2。

【句意】降って来た雨の気配の見える、三輪が崎

「三輪が崎」は紀伊国の歌枕。「見」を掛ける。「くるしくもふりくる雨か三輪の崎佐野のわたりに家もあらなくに」（新勅撰集・羇旅・五〇〇・よみ人知らず。原歌は万葉集・三・二六五、長忌寸奥麿）が本歌である。

【付合】「市人には、…三輪の里」（随葉集）、「三輪ニハ　杉、門、市」（連歌付合の事）。但し、市と寄合になるのは、紀伊の「三輪が崎」でなく、大和の「三輪」（現・奈良県桜井市金屋）で、古代から栄えた海柘榴市がある。「大和なる三輪の市路に急ぎても何時まで世にはふるの山ごえ」（夫木抄・三一・一四八六三・寂蓮）など。本歌により、雨が降って来ても、辺りに雨宿りする家もないため、市場の小屋に仮泊することになる。

68　袖に杉間の風ぞ荒（あれ）たる　仙

【式目】雑。衣類（袖）。植物木（杉間）。「荒」。

【句意】袖に杉の間を吹き抜ける風が吹きすさぶ。

「杉間」は杉木立の間。大和の三輪山は杉を神木とする。「古郷の三輪の山べをたづぬれど杉間の月のかげだにもなし」（後拾遺集・雑二・九四〇・素意）。

【付合】三輪と杉、また天候の急変を暴風で受けた。

69　波激停征櫓（波　激して　征櫓を停む）　清

【式目・平仄】雑。水辺用（波）。○●○○●。水辺は三句去り、67と1句しか隔たらない。

【句意】波が激しく、漕いでいく櫓の手を止める。

この句を上杉景勝主従が朝鮮に在陣した経験の反映とする解釈があるが、「征」は漕ぎ出すことで、必ずしも「外征」の意ではない。「征棹」「征櫂」も、「餞筵猶未収、征櫂不可停（餞筵猶未だ収まらざるに、征櫂停むべからず）」（白氏文集・五一「別蘇州」）。「瀟湘無事後征棹復嘔啞（瀟湘無事の後征棹復た嘔啞たり）」（三体詩・巻三・李咸用「江行」）などの用例があり、やはり漕ぎ出すこと、あるいは航行それ自体を指す。

【付合】暴風に荒波を付ける。山から海に転じた。

70　海深括智嚢（海　深く　智嚢に括る）　需

【式目・平仄・韻字】雑、水辺体（海）。②海1。●○●○◎。孤平。「嚢」。

【句意】海のように深い知恵を持っていても、表に出すことはない。

「海」は広く大きな智慧の譬喩か。「仏心湛水。智恵之海無涯（仏心水を湛ふ。智恵の海涯無し）」（本朝文粋・一三・朱雀院被修御八講願文・大江維時）。「括嚢」は、袋に入れて口を締める。転じて沈黙して知能を隠すこと。「括嚢、无咎无誉（嚢を括る、咎无し誉无し）」（周易・坤・六四）とある。

【付合】69と対句。前句で危険を未然に回避したと見て、それは智慧の賜物としたか。

71　濁清胸不混（濁清　胸　混ぜず）　咲

【式目・平仄】雑。●○○●●。第二字の「清」、各種活字本では「酒」と作る。

【句意】濁と清とを胸中に混ぜることはなかった。

「濁清」は清濁と同じ。平仄の関係で倒置か。楚辞の屈原の歎き「挙世皆濁、我独清（世を挙げて皆濁り、我独り清めり）」（離騒・漁父）からしても、清廉で濁りを混在させなかったの意。「胸」とあるので、殷の賢人比干のことか。紂王の暴虐を諫めたところ、「聖人には心臓に七つの穴があると聞く」と言われて、胸を裂かれて殺された（史記・殷本紀）。

【付合】智慧の深さから、聖賢を詠んだものか。

72　今古力擒強（今古　力　強（きょう）を擒（とりこ）にす）　続

【式目・平仄・韻字】雑。②古1。●○●○◎。孤平。「強」。

【句意】昔も今も、力ある者が、強い者を生けどりにする。

「力」は筋力・体力、「力抜山兮気蓋世（力山を抜き気は世を蓋ふ）」（史記・項羽本紀）など。ここは周の武王が武力をもって強大な殷の紂王を討伐したことを想起か。紂王は自殺したことになっているが、武王が生け捕りにしたとする書も多い。たとえば「文王見詈於王門、顔色不變、而武王擒紂於牧野（文王王門に詈られ、顔色変ぜず、しかるに武王紂を牧野に擒にす）」（韓非子・七・喩老・二一）とある。

【付合】前句が紂王のことだとすれば、武王のこととして意味上も対句となる。

73　國遠き御調（みつぎ）もはこぶためしあれや　旨

【式目】雑。

【句意】遠国からも貢物を献上される例があったことだなあ。

「御調」は、属国から服属のしるしとして貢献されるもの。「あまざかる鄙のながぢもへだたらずはこぶ御調の民のゆききは」（宝治百首・旅行・三七七五・藤原定嗣）、「わが国の御調そなへてとしごとにいまも百済の舟ぞたえせぬ」（年中行事歌合・大唐商客・一〇〇・女房）などが参考歌。

【付合】周の武王が殷を討つと、西戎から珍しい大犬を貢いだ。「惟克商、通道于九夷八蠻、西旅底貢厥獒（惟れ商（殷）に克ちて、遂に道を九夷八蠻に通ず。西旅、厥の獒を底貢（しこう）す）」（尚書・旅獒）。そこで召公が「珍禽奇獣は国に養わず、遠き物は宝とせず」と武王を諫めたとする。

74　民の家居も猶昌（さかり）なり　茂

【式目・韻字】雑、人倫（民）、居所体（家居）。③家1。「昌」。和訓押韻「昌（シヤウ）サカリ　花ニハ不可也」とある。

【句意】国も民の住（サカフル）まいもますます栄えている。

【付合】連珠合璧集「御調トアラバ、…民のかまど」。「たかき屋にのぼりてみれば煙たつ民のかまどはにぎはひにけり」（新古今集・賀・七〇七・仁徳天皇「みつぎものゆるされて、くにとめるを御覧じて」）により、やはり貢物を停止したことで民戸を富ませた、わが国の聖天子で受ける。

75　晩煙山鎖着（晩煙　山　鎖着す）　俊

【式目】雑、夜分（晩煙）、聳物（晩煙）、山類体（山）。●○○●●。

【句意】夕餉の煙で、山は、鎖を巻きつけたようである。

「晩煙」は、夕餉を作る竈の煙。「鎖着」の語は、たとえば唐・賈島の「田将軍書院」詩、「行背曲江誰到此、琴書鎖著未朝廻（行きて曲江に背きて誰か此に到らん、琴書鎖著して未だ朝より廻らず）」（長江集・一〇）など、何かを中に入れて鍵を掛ける様。しかしこの句は山肌に煙がたなびく様子を鎖が巻き付いたようだと形容するもので、ズレがある。

【付合】連珠合璧集「煙トアラバ、…民のかまど」。「民の家居」から仁徳天皇の故事を介して、夕方山肌に棚引いている煙を発想。既に和歌では「あしひきの山のあなたの夕けぶり民のかまどのほどは見えけり」（洞院摂政家百首・眺望・一七〇五・藤原経通）と詠まれている。

76　朧月水忩忙（朧月　水　忩忙たり）　咲

【式目・平仄・韻字】春（朧月）、夜分（朧月）、光物（朧月）、水辺用（水）。③春月1。○●●○◎。「忙」。

【句意】朧月の下、水は、せわしく流れる。

「朧月」と「水」は、歌枕の「おぼろの清水」を連想か。「みくさゐしおぼろの清水そこすみて心に月のかげはうかぶや」（後拾遺集・雑三・一〇三六・素意）。

【付合】連珠合璧集「煙トアラバ、…水」。75句と対句。山に巻きついた煙を、水に煙る朧月で受ける。朧月の下を水が流れる情景は、和歌に学んだ表現か。

77　瀧津瀬にせきとめられぬ花散りて　意

【式目】春（花）、水辺体（瀧津瀬）。②瀧2、④花3。

【句意】滝の急流にせきとめられない花が散って流れていく。

滝の急流と落花の取り合わせは、「春風の吹きそめしより滝つ瀬のこほりもとけて花ぞちりける」（古今和歌六帖・一・三七九・はるのかぜ）、「吉野川滝つ岩波せきもあへずはやく過行く花の比かな」（拾遺愚草・上・一〇一九）などがある。

【付合】激しく流れる「水」のつながりから「瀧」を導く。

78　しづえかたよる岸の青楊（あをやぎ）　旨

【式目・韻字】春（青楊）、植物木（青楊）、水辺体（岸）。③柳1。「楊」。和訓押韻「楊（ヤナキ）　春―万（アフヤキ）」。

【句意】岸の青柳の下枝が水面について、一方に寄っている。

「しづえ」は下枝。「池水の水草もとらであをやぎのはらふし

づえにまかせてぞみる」（後拾遺集・春下・七五・経衡）。「青楊」は、川柳・水揚の異名。

【付合】「瀬」と「岸」。柳は水際の植物で、その枝の先が急流に流されているさまを詠む。

79　機外遊絲乱（機外　遊絲乱る）　需

【式目】春（遊糸）、動物虫（遊絲）。○●○○●。

【句意】機織りから飛び出した糸が乱れるように、大空に陽炎が立っている。

「遊絲」は春の野に立つ陽炎。糸の縁で機を出すのは常套。「機外」という語は珍しく、機織りの外の意か。「あまつ空雲のはたてにみだれつつ目もあやなりやあそぶいといふ」（千五百番歌合・二六一番左・五二〇・季能）。この歌は「雲のはたて」に「機」を掛ける。このような和歌の趣向に基づくか。

【付合】連珠合璧集に「柳トアラバ、絲」「青柳トアラバ、絲よりかけて」とある。

80　樓頭横笛揚（樓頭　横笛揚る）　俊

【式目・平仄・韻字】雑、居所体（樓）。○○○●◎。「揚」。

【句意】楼の上で横笛を音高く鳴らす。

「樓頭」と「横笛」との取り合わせは、唐・張巡「聞笛」詩の「旦夕更樓上、遙聞横笛音（旦夕更樓の上、遙に聞く横笛の音）」（古今詩刪・一五。唐詩選・三にも）などによるか。「笛…樓の上」（竹馬抄）ともある。

【付合】前句の「糸」を「絃」と見て、こちらは「管」で応じた。随葉集「管絃（イトタケ）には、…糸とは琴の事、竹とは笛の事也」。

81　つまごとのおもひもまさる秋のくれ　茂

【式目】秋（秋）。恋（おもひ）。時分（くれ）。芸能（つまごと）。

【句意】女の弾く琴の音が聞こえて、思いが募る秋の夕暮であるよ。

「つまごと」は爪で弾くことから箏のこと。「妻」も重ねる。「秋の暮」は秋の夕暮。「春の暮、秋の暮としたるは大暮にてはこれなき也、時分の暮なり」（産衣）。

【付合】「笛」から「琴」への連想。久しぶりに恋の句を出した。

82　別涙露濃々（別涙　露　濃々）　清

【式目・平仄・韻字】恋（別涙）、降物（露）。②別恋1。●●●○◎。「濃」。

【句意】別離の時の涙で露のようにしとどに濡れる。

「別涙」は後朝の別れを悲しむ涙。連歌新式に一座二句物として「待恋。逢恋。別恋等之類」がある。「濃々」は、露の多いこと、ここでは顔が涙に濡れている様。毛詩・國風・鄭風、「野有蔓草」の「野有蔓草、零露漙漙（野に蔓草有り、零露漙漙たり）」による。この詩の底意は毛伝に「思遇時也。君之澤不下流、民窮於兵革、男女失時、思不期而會焉（時に遇ふを思ふなり。君の澤下流せず、民兵革に窮す、男女時を失ひ、期せずして會するを思ふのみ）」とあるが、そこまで読まなくとも、

まずは男女が逢えない悲しみと取れる。

【付合】「秋の暮」から「露」につなげる。前句で夕には相手への思いがまさるものの、逢えても朝に別れなくてはならないことに涙を流すことで付く。

83　電頃相逢處（電頃　相逢ふ處）　咲

【式目・平仄】恋（相逢）。●●○○●。

【句意】少しの間、男女が出会う場所。

「電頃」は、いなづまがひらめく程の刹那の意。漢語の用例に北宋の道教類書の雲笈七籤・一〇六・其一に「千齢猶一刻、万紀如電頃（千齢猶ほ一刻、万紀電頃の如し）」とある。「相逢」は、人と人とが会うこと。

【付合】連珠合璧集「稲妻トアラバ…露にやどる」。短い逢瀬の場で、露のような涙を落す。前句とは、金剛般若波羅蜜経「一切有為法、如夢幻泡影、如露亦如電、応作如是観（一切有為の法、夢幻泡影の如し、露の如し亦た電の如し、応に如是観を作すべし）」などによる「露電」の語もあり、意味上もよく付く。

84　のこるもうすき袖の移り香（が）　長

【式目・韻字】恋（袖の移り香）。衣類（袖）。「香」。

【句意】あの人が袖に焚き染めていた香りは微かに残るのみ。

「袖の移り香」は、一夜を共にして移った恋人の香。「ありしよの袖のうつり香きえはててまたあふまでのたのみだになし」（六百番歌合・顕恋・七三九・女房）がある。表現は飛鳥井雅親の「うつり香の残るもうすき形見かな人のよりゐし真木の柱は」（亜槐集・恋下・寄柱恋・九三四）に酷似。

【付合】竹馬集「袖の移り香。付合には、逢ひ見し中」。前句でほんのわずかな間しか逢えず、逢ってもすぐに別れてしまう切なさを「袖の移り香」に込める。後朝では82句と輪廻する感がある。

85　取りとむる衣を形見もはかなしや　旨

【式目】恋（句意）。衣類（衣）。

【句意】手許に留めた衣を思い出とするのもはかないものだ。

「取りとむる」は、押さえ留める、引き留める。光源氏が空蟬の寝所に忍び込んだが、女は察して逃げ、源氏が女の残した薄衣を手に空しく帰る場面による。「蟬のはのよるの衣はうすけれど移り香こくもにほひぬるかな」（古今集・雑上・八七六・友則）も重なる。

【付合】源氏物語・空蟬巻による付合。拾花集に「袖の移り香には、…形みの衣」、連珠合璧集に「移り香トアラバ…かたみ」とある。

86　あづまのはてにかへる装（よそほ）ひ　茂

【式目・韻字】雑、旅（かへる）。「装」。

【句意】東方の果てまで帰る旅装を整える。

「あづまのはて」とは、東海道の東端の常陸国で、そこは同時に日本国の東端でもあった。「波たかき鹿島の崎にたどりきてあづまのはてをけふみつるかな」（夫木抄・二六・一二一二

三・藤原光俊）。「装ひ」は旅装、旅の準備・支度。

【付合】前句の「衣」を天女が羽織る衣でとりなし、漁師がその衣を隠したものの、結局天女は月へと帰る、羽衣伝説に取材か。謡曲「羽衣」（伝世阿弥作）では、「東遊の数々に、東遊の数々に、その名も月の宮人ハ、三五夜中の空に又。満願真如の影となり…」と、富士山の天女の舞に起源を持つとして、「東遊」の駿河舞について語る。天女の帰る先は、富士山・蓬萊とも、「東」にあるとの理解でよい。なお、これも景勝らの朝鮮からの帰還を詠んだとする説があるが、首肯し難い。

87　あら玉の年や今朝より霞むらん　　三

【式目】春（あら玉の年・霞むらん）、時分（今朝）、聳物（霞むらん）。①今朝1。

【句意】新しい年を迎えた朝から空が霞むのであろうか。

「あらたまの」は、新年・正月・新春に懸かる枕詞。年が「改まる」を掛ける。

【付合】「あづま路はなこその関もあるものをいかでか春の越えて来つらむ」（後拾遺集・春上・三・師賢）など、春は東方からやって来ることで付く。

88　鶯亦弄春光（鶯も亦た　春光を弄す）　　咲

【式目・平仄・韻字】春（春光）、動物鳥（鶯）。光物（春光）。③鶯1。○●○○◎。「光」。

【句意】鶯もまた、春の穏やかな気色を愛でる。

「春光」は、春のけしき、春の風光のこと。

【付合】「あらたまの年」から「鶯」、「あらたまの年たちかへる朝より待たるるものは鳶の声」（拾遺集・春・五・素性。和漢朗詠集・鶯にも）による。

89　吟履為花緩（吟履　花の為に緩し）　　続

【式目・平仄】春（花）、植物木（花）。③履1、④花4。○●○○●。

【句意】吟行する詩人は花を見るため歩調がゆっくりになる。

「吟履」は、「吟笻」などと同じく、履き物から歩き回る詩人その人を指す。戦国期にはよく見られ、万里集九の詩に「吟履踏春鶯路斜、若王子廟共斟霞（吟履春を踏めば鶯路斜めなり、若王子の廟共に霞に斟む）（梅花無尽蔵・一・山房看花）、また武田信玄主催の天文十五年七月二十六日和漢聯句にも「吟履為誰湿（吟履誰が為に湿ふ）」（三五・湖月）の句がある。

【付合】前句の「鶯」に「吟履」が対応する。

90　あかぬをまゝの袖の倡ひ（いざな）　　意

【式目・韻字】雑、衣類（袖）。「倡」。和訓押韻「倡（シャウ）（イザナフ）」。

【句意】満たされない状態のままあちこち引っ張られていく。

「あかぬをまゝの」とは、満たされない状態のまま。「袖の倡ひ」は袖またはその人が惹かれること。「いざなふ　さそふニ二也。さそふ心也。又いざと許もさそふ也。共ニ倡（イザ）の字也」（産衣）。

【付合】履と袖で対。詩人が歩くと、あちこちに心惹かれるさま。意味上の付合。

91　とくはたゞかはる日毎の法の道　　仙

【式目】雑、釈教（法の道）。②法1。

【句意】変わりゆく毎日ひたすらに仏法の道を説く。

仏教では、入る道は違うが同じ悟りに辿り着くことをいうか。「法の道いるべき門はかはれどもつひにはおなじさとりとぞ聞く」（新後拾遺集・釈教・一五〇四・如月）。「とくのりのをしへはこころこころにて」（元亀二年三月千句第七初何・六七）も同じ意であろう。

【付合】随葉集「とく法には、墨染の袖」。前句の「袖」を出家者にとりなし、さまざまな教義や修行に触れるさまとなる。

92　秋になりぬる月の涼しさ　　三

【式目・韻字】秋、光物（月）、夜分（月）。②涼しき1。「涼」。

【句意】秋になったことが感じられ、月が澄んでいる。

「月の涼しさ」の和歌の用例は、「しげりあふ庭の木ずゑをふき分けて風にもりくる月のすずしさ」（風雅集・夏・三八二・鷹司師平）がある。この歌のように本来「涼しき」の語は夏であるが、秋句とするために敢えて「秋」を入れたか。

【付合】この句は秋であるが、前句の「法の道」と「涼しさ」とを重ねると、「涼しき道　極楽の事にして非レ夏」（産衣）とあるように、清く澄んだ境地、すなわち浄土への道となる。源氏物語・椎本巻に、「世に心とどめ給はねば、いで立ちいそぎをのみおぼせば、すずしきみちにもおもむき給ひぬべきを」も参照か。

93　すゞむしの声は砌に遠からで　　旨

【式目】秋（すゞむし）。動物虫（すゞむし）。①鈴虫1、①砌1。

【句意】軒下近くから鈴虫の声が聞こえる。

「砌」は、軒下に敷いた雨滴を受ける石。転じて庭そのもの。連歌新式に一座一句物、「不可為居所」とある。作中主体の近くに鈴虫の声がすること。

【付合】連珠合璧集「秋の心、…鈴虫」。「すず虫のこゑふるさとの浅茅生によすがらやどる秋の月かな」（後鳥羽院御集・一二四四）など、砌の虫とともに月も宿るとした趣向は多い。鈴虫・蟋蟀・松虫などいわゆる名虫は一座一句物なので、終わり近くなって出した感もある。

94　露於蘭草芳（露は蘭草に於いて芳し）　　続

【式目・平仄・韻字】秋（露・蘭草）、降物（露）、植物草（蘭草）。●○○●◎。「芳」。

【句意】蘭においた露は芳しく香る。

「蘭草」は藤袴の異名。芳香がする。そこに露が置いた様は「露滴蘭叢寒玉白、風銜松葉雅琴清（露蘭叢に滴て寒玉白し、風松葉を銜んで雅琴清し）」（和漢朗詠集・蘭・三三九・源英明）による。

【付合】連珠合璧集「虫トアラバ、露」、また「蘭」は軒近く植えて鑑賞するので「砌」と取り合わす。「蘭叢衰砌半摧紫桐葉満壇不払紅（蘭叢砌に衰へて半ば紫を摧く、桐葉壇に満ちて紅を払はず）」（和漢兼作集・八二七・親隆）など。

95　分けかへる野はたび〳〵の雨そゝぎ　意

【式目】恋（句意）。降物（雨）。②雨3。使用制限を超える。

【句意】分け入って帰る野には、何度も雨がかかって散る。

「分けかへる」は、草などを凌いで野を帰るさま、露に濡れると詠むと、「わけかへる路のさゝ原朝露の思はぬさへもけぬがつれなき」（草根集・四三七〇・後朝恋）など、恋の気分が濃い。「雨そそぎ」は、催馬楽・東屋「東屋の真屋のあまりのその雨そそぎ　我立ち濡れぬ殿戸開かせ」により、軒下から滴る雨水のこと、やはり女に逢えず涙に濡れたさまを暗示する語。

【付合】連珠合璧集「雨そゝぎトアラバ…蓬生の宿」。源氏物語・蓬生巻で、源氏が末摘花の屋敷を訪ねる場面、「御さきの露を馬の鞭して払ひつゝいれたてまつる。雨そそぎも、なほ秋の時雨めきてうちそゝげば」による。前句の「蘭」は零落しながら貞節を守った女の譬喩となり、付句はそんな女の家に通い、朝に草をかき分けて帰る男の描写となる。

96　暮るればしばし人ぞ彷徨（たたずむ）　仙

【式目・韻字】恋（句意）、時分（暮るれば）、人倫（人）。

「徨」。和訓押韻に「徨（クワウ）　彷（ハウ）―日本」とある。

【句意】暮れになって、男はしばし行ったり来たりしている。

「たたずむ」は、行きつ戻りつ、その辺りをうろつくこと。夕暮、女の門前でしばしためらう男の様子である。

【付合】前句で後朝の別れなので、付句は夕暮の男の来訪とした。「雨そそぎ」の語からも、たたずむ男を連想しやすい。

97　深宮門可鑰（深宮　門　鑰（やく）すべし）　咲

【式目・平仄】恋（句意）、居所体（宮・門）。③宮1、②門1。○○○●●。

【句意】後宮では門に鑰をかけるであろう。

「深宮」は、宮殿の奥深く、後宮のこと。「鑰」は、かぎ・とざし。杜牧「宮詞」、「監宮引出暫開門、随例須朝不是恩、銀鑰卻収金鎖合、月明花落又黄昏（監宮より引き出でて暫く門を開く、例に随ひて須く朝すべし是恩にあらず、銀鑰卻りて収めて金鎖合す、月明らかに花落ち又黄昏）」（三体詩・一）による。後宮には、天子の寵愛を切望する宮女がいるが、夕暮には門が厳しく鍵で閉ざされる。その歎きを詠んだ詩。

【付合】前句と連接させると、男が夕方女のもとを訪ねて来たが、門が閉ざされることを恐れ、うろつくさまとなる。

98　少室渡堪航（少室　渡り　航（ふなわたし）するに堪へり）　需

【式目・平仄・韻字】雑、釈教（少室）、名所（少室）。水辺外（航）　●●●○◎。「航」。和訓押韻「航（カウ）フナワタシ　ワタシフネトモ用之」

【句意】少室山では、渡し船で対岸に行くことができる。

「少室」は、中国河南省登封県の嵩山の西の山。潁水の源。達磨が面壁九年の座禅を行った地。

【付合】前句が門を厳重に閉ざすところから、弟子の入門を容易に許さなかった達磨の姿勢となる。思いがけぬ転じ方である。

99　ながれあるとみのを川の末廣み　　茂

【式目】雑、釈教（とみのを川）、水辺体（とみのを川）、名所（とみのを川）。

【句意】流れの絶えない富緒川の末が広いように、仏教の教えは広く末にまで伝わっているので。

「とみのを川」は、法隆寺附近を流れる富雄川の古称。聖徳太子または仏法の源流の象徴。その「すゑ」は我が国での仏教各宗となる。「汲みて知れたえせぬ法の水はみな富緒川の末にやはあらぬ」（再昌・二四・尺教・四五九二）。

【付合】少室（達磨）→聖徳太子（とみのを川）。聖徳太子と片岡山に臥していた旅人との贈答歌、「しなてるや片岡山にいひにうゑてふせる旅人あはれおやなし／いかるがやとみのを河のたえばこそわがおほきみのみなをわすれめ」（拾遺集・哀傷・一三五〇、一）による。後にこの旅人の正体は達磨であり、達磨は太子に直接伝法したと広く信じられた。富緒川から少室山へと仏法の起源を遡る。

100　たちそふ波のとをき旁（かたがた）　　長

【式目・韻字】雑、水辺用（波）。「旁」。

【句意】重なる波があちこち遠くの方で立っている。

「たちそふ波」は、波が重なり立つ様。「待ちなれし都の山の面影も立ちそふ浪にぬるる月かな」（心敬集・海上待月・一三六）。「旁」は、あちらこちら、また至る所にという意。

【付合】川→波。あちこちで波を立てている光景で、祝言の句。

五、まとめ

最後に、本漢和百韻の特色をまとめておきたい。

まず漢句四七・和句五三と不均衡である。連衆の人数は漢和それぞれ六人だが、漢句作者は実質五人で（来次氏秀は一句のみ）、漢が押され気味であった。かつ和句作者には氏長・紹旨・寿三（元齋）・了意など、ほぼ当代の歌人・連歌師といってよい人々が揃っているのに対して、漢句作者では禅僧の西笑以外は専門家とは言い難い。そうした中でも漢和聯句を催す目的も、上杉家連歌壇の性格と併せて、考究の余地があろう。

漢和聯句では偶数句において押韻し、和句であっても韻を踏む。押韻は陽唐韻で、一貫して守られている。韻字とその訓は、漢和聯句のために編纂された和訓押韻などの字書に従っていると思われる。10句「蔵（かくるゝ）」、26句「篁（たけ）」、44句「惶るゝ（おそるゝ）」、90句「倡ひ（いざなひ）」など、押韻のために敢えて用いた字が見受けられる。韻字の制約は、句を付けて詠み進めるにあたって、最も重要視されていたと言えるだろう。

平仄については、いくつか孤平が見られる（46・70・72）が、余り気にしていなかったのかも知れない。

式目に大きな違反は見られない。気づいたものでは、

・秋は三句以上連続だが、81句の秋が一句で終わっている。

・旅は五句去であるが、48句の旅と53句の間が四句しかない。

・水辺は三句去であるが、67句と69句の間が一句しかない。

などであるが、おおむねよく守られているといってよい。特に

体用については慎重であったようで、水辺の体用も輪廻させないよう注意している。但し物数で、「雨」は25、67、95句に現れ、かつ全て和句。雨は一座二句物とする規定に明らかに反する。なお「花」はこの時代には各折に一つずつの一座四句物とされる。21、39、63、77、89句と五回現れるが、63句の花は「すみれ」で、数えないらしい。物数のうち、花・雪・鐘・雁などが漢和同数となっていて配慮の痕が窺えるが、瀧は和句のみ。また表八句は漢和法式によれば、漢和聯句の初折表は、漢和四句づつ、対句を一対、八句目は和句とする規定があるが、これは守られていない。

典拠については、兼続の儒学研鑽の現れか、45・46・70句に周易、73句に尚書、82句の毛詩など、経書に学んだものが見られる。また31・32句、53・54句、71・72句は中国古代の著名な帝王や聖人のエピソードを踏まえているとおぼしいが、直接に漢故事を表現するのではなく、ややひねった形で摂取している。さらに兼続をはじめ、漢句に唐宋の著名な詩を典拠としたものが散見される。三体詩は言うまでもない。とりわけ杜牧や蘇軾の詩文からの影響が見られるが、これは古文真宝や事文類聚などを通じてであろう。兼続の蒐集・講釈した漢籍との関係も興味深い。兼続が、史書・文学書・医学書など幅広い蔵書を有していたことは有名で、直江版文選をはじめ、古文真宝後集抄、書き入れから五山僧に就いた学問成果が窺える宋版史記・漢書・後漢書等との比較が今後の課題である。さらに、米沢市上杉博物館には漢文を記す際に使われる助字・文体を解説した文鑑と題する写本が伝わる。漢詩・漢句の実作にあたってこれらを利用していた可能性を示唆する。

日本古典文学からも幅広く取材しており、古歌はもちろん、6・58句には伊勢物語の影響があり、また33・34、84・85、94・95句に、明らかな源氏物語の場面による付合が見られる。それから44句でも単に「しもがしもまで」という語によって、夕顔巻の場面を連想させるなど、連衆が源氏物語に深く傾倒していたことが窺える。65・66、85・86句は、古典には典拠を求め難いが、それぞれ謡曲の〈松虫〉〈羽衣〉を介在させるとよく分かる付合で、こうしたものに親しんでいた結果であろう。謡曲との関係は今後の課題である。あたかも、ちょうど豊臣秀次の命による謡抄の編纂が行われる直前であり、西笑もその場に連なっている。

詠者に着目すると、ともに漢句作者で西笑承兌（39、83句）、朝清（34、45句）などが巧みな付け方で、前句をよく転じている。連歌師が多いのも特色で、84・85・86句では、「袖の移り香」（氏長）を、「衣を形見」（紹巴）と、空蟬の残した衣と取り成しているが、その衣を「天女の羽衣」と昌茂が転じた。連歌師の腕が光った箇所である。兼続自身は、15・53・64句など典拠や故事に拘るあまり、やや観念的で難解な句が多いだろうか。

最後に本百韻では、漢句でありながら、意味・語法ともに正規の漢文とは離れた事例が散見する。57句「露間」が和語「つゆのま」として、35句の「儘」がおなじく「まま」の意味で使用されていたり、75句「鎖着」、79句「機外」の用法、76句の「朧月」「水」の取り合わせなども、和歌の発想に学んだよう

にも思われ、一種の「和臭」が感じられる。和臭は、もちろんこの漢和聯句だけの現象ではないが、特徴的であり、連衆らの作句意識、典拠の受容なども含め、分析の余地が大いに残されている。

附記　底本翻刻を許可いただいた米沢市上杉博物館、調査に際して種々お世話になった阿部哲人氏に御礼申し上げます。

注

（1）廣木一人・松本麻子・山本啓介編著『文芸会席作法書集―和歌・連歌・俳諧―』（風間書房、二〇〇八年）、所収の「連歌執筆之次第」脚注（二〇五頁）によれば「室町後期頃には執筆は一順の末一句のみの場合が多くなる。」という。また同書所収の「用心抄」には「執筆の字をば悉く書きて、奥に少し退けて書くなり。」、「次に執筆の一順の事。表にはすべからず。」とあり、本聯句において氏秀の名が句上げの一番最後に書かれていること、彼の句が初折のウラ十二句目に見られることから執筆であったと推測される。

（2）『戦う村の民俗を行く』（朝日選書　朝日新聞出版　二〇〇八年）「連歌をよむ武士たち　上杉連歌壇の人と作品」（初出一九八七年）。

（3）片桐昭彦「直江兼続と一族・家中」（矢田俊文編『直江兼続』所収、高志書店、二〇〇九年）参照。

（4）佐藤博信『中世東国政治史論』（塙書房、二〇〇六年）「連歌師昨夢斎紹旨に関する考察―安房文化史の断章」（初出二〇〇〇年）参照。

（5）『米沢市史　編集資料　第四号〈俳諧〉』（一九八一年）

直江兼続一座漢倭聯句百韻「楓散風紅色」式目表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
季・月・花・恋・同字	秋	秋	秋・月	秋	秋	春	春	春	雑	雑	夏・月・恋	恋	恋	雑	雑	秋	秋	秋	恋
旅・神祇・釈教・述懐														述懐				釈教	
動物（生類）・植物	植物木				動物鳥										動物鳥		植物木		
時分・夜分・天象（光物）			夜分・天象		時分		天象				時分・天象	夜分							夜分
山類・水辺・居所		山類体	水辺体	居所用			水辺体		山類体	山類体		居所体		水辺体	水辺用	山類体			
降物・聳物		降物	聳物			聳物				聳物							聳物		
人倫・名所・国名・衣類・食物・芸能									人倫					人倫・名所					
物数		②時雨1	②瀧1		②雁1	④原1	①のどか1	④雪1	②岨1		②名残1	①閨1				②麓1・②嵐1		②寺1	④鐘1

41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
春	春	春・花	雑	雑	雑	雑	恋	雑・恋	秋	秋	秋・月	雑	雑	雑	雑	春	春	春	春	春	冬・恋
				旅									釈教		旅						
		植物木													植物竹		動物鳥		植物木	植物木	
				時分			夜分				夜分・天象					天象	時分				
	居所体		山類体	山類体			居所体			水辺外	水辺体	山類体	山類体		居所体						
									降物							降物・聳物					降物
			人倫			人倫				衣類		名所		人倫							衣類
	②村1	④花2	②男1・②岡1			③書1	①床1・③燈1		④玉1			④鐘2				②雨1	④夕1			④花1・④雪2・②筵1	

	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61
季・月・花・恋・同字	雑	雑	雑	夏	雑	雑	雑	冬・月	雑	春	春	春	恋	恋	恋	秋・月	秋	秋	雑	雑
旅・神祇・釈教・述懐						旅	旅					旅								述懐
動物（生類）・植物											動物鳥								植物竹	動物鳥
時分・夜分・天象（光物）								夜分・天象	天象				時分			夜分・天象		時分		
山類・水辺・居所	水辺外			居所体	居所体		水辺用・水辺外		山類体	山類体			居所体							
降物・聳物					聳物					聳物						降物				
人倫・名所・国名・衣類・食物・芸能		人倫	人倫									人倫	人倫					名所		
物数		②君1		④屋1	②郷1	②旅1・④空1					②鴈2		②朝1					①やや寒き・②野辺1		④鳥1

62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83
春	春	春	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	雑	春・月	春・花	春	春	雑	秋・恋	恋	恋
動物虫	植物草					植物木										植物木	動物虫				
													夜分	夜分・天象					時分		
				居所体	水辺体		水辺用	水辺体				居所体	山類体	水辺用	水辺体	水辺体		居所体			
		聳物			降物								聳物							降物	
				人倫	名所	衣類						人倫							芸能		
			②けふ1・②筵2・③酒1	④屋2	②雨2			②海1		②古1		③家1		③春月1	②瀧2・④花3	③柳1				②別恋1	

	季・月・花・恋・同字	旅・神祇・釈教・述懐	動物（生類）・植物	時分・夜分・天象（光物）	山類・水辺・居所	降物・聳物	人倫・名所・国名・衣類・食物・芸能	物数
84	恋						衣類	
85	恋						衣類	
86	雑	旅						
87	春			時分		聳物		①今朝1
88	春		動物鳥	天象				③鶯1
89	春・花		植物木					③履1・④花4
90	雑						衣類	
91	雑	釈教						②法1
92	秋・月			夜分・天象				②涼しき1
93	秋		動物虫					①鈴虫1・①砌1
94	秋		植物草			降物		
95	恋					降物	人倫	②雨3
96	恋			時分			人倫	
97	恋				居所体			②門1・③宮1
98	雑	釈教			水辺外		名所	
99	雑	釈教			水辺体		名所	
100	雑				水辺用			